魔血吸の在り方

羊妨害者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔血吸の在り方

【Ｎコード】
Ｎ６７６４Ｚ

【作者名】
羊妨害者

【あらすじ】
メチャクチャな不幸に襲われた僕は、気付けば異世界に居た。初っ端から最悪な自体が襲ってくるけど生存本能全開でなんとか生き延びてやったぜ！ってあれ？なんか体が変なんだけど・・・もしかしてこれって・・・！？

僕の終わりと始まりについて（前書き）

処女作です、どころか初めて物語を書きます。
小説家になろうさんに書かれた作品がおもしろかったので、皆様の暇つぶしに貢献出来ればと思い書いた作品です、拙筆な上、筆に任せて書いているので、それでもよいという方はどうぞ、お読みくださいませ。

僕の終わりと始まりについて

目を覚ますと世界が逆さまになっていた

足の方に木々が伸び、その先に空がある

頭上に地面があり、とても質の良さそうな腐葉土もそこにあった

そんな中、寝ぼけた頭で色々考えた挙句、僕は呟いた。

「ここ、・・・どこ？」

それが異世界に来て初めてのセリフだったことを、僕はまだ知らない

＜魔血吸の在り方＞

そんな訳で、段々と晴れていく意識の中、徐々に自分の状態が理解出来てきた

僕はどうやら背の高い木の枝にズボンが引っ掛かって、逆さ吊りになっているようだ

もちろんそういう事が日常的に起きるほど、アグレッシブな人々が僕の家の周りに住んでいることはない（僕はそう信じている）し、当然僕にも逆さ吊りで寝る趣味はない。

そうなってくると、自然に、意識がなくなる前のことについて考えはじめる。

そこで僕は思い出した。

「そうだ、僕は・・・何故か海外旅行になった修学旅行で飛行機に乗ってる途中にハイジャックにあって何故か僕だけ見せしめに殺されかけたところをなんとか反抗し、反撃し、遂に無力化に成功しかけたところでハイジャック犯の最後の抵抗で扉から突き落とされ太平洋の真ん中にヒモ無しバンジーしてなんとか海にうまく飛び込んで水面に浮いていき、遠くに見える無人島に流されながら泳ぎながらなんとかたどり着き、水源を確保して食料を探し、大丈夫そうに見えたきのこを食べたとたん苦しくなって意識がなくなったんだった」因みにそのきのこは猛毒であった

・・・我ながらありえないな、うん

思い返せばここ数ヶ月は不幸のオンパレードだった

マンションの上から植木鉢が降ってきたり（額にかすった）トラックがつっこんできたり（後頭部にかすった）人間違いで殺されそうになったり（脇腹に包丁がかすった）何故かマンホールの蓋が開いていたり（指が引っかかって助かった）などなど・・・

細かいことを入れれば百はあったんじゃないかな、うん

父さんが僕に常々「何があっても生きろ、生きてさえいればいい」と言ってこなかったら、最初の数回で諦めていただろうな

しかしまあやれやれである、結局のところ僕は死んだのだろうか？

別に天国や地獄に行くとまでは思わないけど、いきなり森の中とはこれいかに

もっと分かり易く「あなた死にましたよ」って言ってくれないと懺悔のしようもない

いやこの思考こそ、本当に仕様のないことなのかも知れないけど・・・

と、そこで枝がピキピキと音をたてているのに気がついた

（あ、これは折れるな）っと思う間もなく枝は折れ、頭が地面に吸い込まれる

異常に鈍い体を何とか動かし頭を庇うが、思った程の衝撃もなく地面に落ちた

そこでようやく僕は体を動かして辺りを見る気持ちになった

どうやら森のかなり深い所らしく、人の気配など微塵もない

僕が死んだ（？）はずの無人島はこれほど背の高い木々はなかったように思うし、なにかが足を踏み入れた形跡すらない

そう、僕の足跡すらないのだ

よってここはあの無人島ではないはずだ

他の可能性を考えても、あれほどの高さに僕を引き上げる動物なんていたとしたって地面に何かしらの跡が残るはずだ

あるとすれば人為的に行われるぐらいだが、それこそメリットがなさすぎる

うむ、このミステリーは僕には解けそうもない

解けないこと、分からないことは後回し☆

テストという関門を毎度くぐり抜ける日本学生にとって必須のスキルだ

しばらく辺りを歩いてみるが、特に何もない、いや、あるにはあるが、素人では判断のつかない事ばかりで意味を見出せない

ここが安全である保証は全くないので、早急に移動しなければ

因みに動物はいるようだ

鳥（？）の声があちこちから聞こえてくるし、虫もいる

獣道のようなものも見つけたし、縄張りの主張のために傷つけられた木も見つけた

傷の位置は大体下から２ｍぐらいの位置だ

・・・やばい、これはつまりその位置に傷をつけることができる動物がいるということだ

熊だとしたら絶対にかなわない、死んだふりは効かないらしいし

兎にも角にも移動しなければということで、僕は太陽（？）の位置を方角の基準にすることにした

太陽（？）の方角は登りぎみで、逆は下りっぽかったけど、僕は太陽（？）の方角に向けて歩くことにした

先ほどから太陽に？が付くのは確信が持てないからだ、もしかしたら地球にとって月にあたるものかもしれないし、沈んだり昇ったりするのかもわからない

・・・しかし面倒なので、僕は太陽（？）を太陽だと思い込むようにしよう、私がそう思うからそうあるのだ、って昔の偉い人も言ってた気がするし

水場を探すなら降りるべきだけど、この場所の状況が知りたい僕はあえて登ることにした

本当なら木に登って辺りを見渡せばいいんだけど、現代の高校生にそれを求めるのは酷である

そんなこんなで登り始めて2時間ぐらい、一向に見晴らしがよくなる気配がない

太陽も低くなってきて、このままいくとこの人工物の一切ない場所で野宿である

流石にあぶないよな、寝て起きれませんでしたじゃ洒落にならん

ちょっと登り始めたのを後悔し出した頃、木々の切れ間が見えた

少し駆け足でたどり着くと、そこは崖になっていた

・・・絶句するほど美しい景色を、僕は人生で初めて見た

夕日が赤く染めあげることで周りの山々は、その威厳をさらに強くし、木々に何とも言えぬ色彩をあたえていた

澄んだ空気はどこまでも見渡せて、夕日の下にわずかに海が見えた

ちょうど僕が立っている場所の真下が川の初めにあたるらしく、そこから川は蛇行しながらも確かに海に続いている

雲は流れ、風が吹き、僕は人生で初めての感動に酔いしれた

（山を登る人はこれを求めていたのか）と、なんとなく知った風な事を思い描いていると、川の途中に橋が架かっているのが見えた

その辺りを注意深く見ると、右側に人工物のようなものがわずかに見えた

よかった！人がいる！と、歓喜をあげようとして思い出す

（夜、どうしよう・・・？）

村に着くまでにどう考えても日が沈む、というか2、3日はかかりそうだ

日が完全に沈む前に寝る場所を決めなければいけない、サバイバル経験皆無の僕にだって分かることだ

一旦森の中に戻り、良さそうな場所がなかったか思い出す

（あそこは落ち葉がたくさんあったから、それに埋もれて寝れば安全かな？それともあの岩場の隙間で寝た方が・・）

などと考えていても、先ほどの景色が頭から離れず、つい振り向いて呆けてしまう

（いつか、いつかもう一度行こう）

そう考えていると、背筋が凍るような、嫌な予感が僕を襲った

僕はとっさに、後ろに倒れるように回避行動をとろうとした

死ぬ直前に起きた百を越える不幸が、彼に第６の感覚を与えていたのである

瞬間、右腕に強い衝撃

左肩から倒れこみ、前転をするように受身をとりながら、予感の正体を確認する

そこには３ｍを越える背丈の怪物がいた

人の形をとってはいるが、体の大きさや手足の指の本数、グレーに近い体色、何より赤い、瞳のない目が人でないことをありありと証明していた

と、そこで、怪物の指先に赤いものが付着しているのに気がつく

おそらく人の血だろう、かなり新鮮で乾いておらず、付いて間もないことが伺える

その段階でようやく気がついた、右腕の感覚が全くない

恐る恐る見てみると、僕の右腕は二の腕を１／５程残して消えていた

僕の終わりと始まりについて（後書き）

勢いで書いてしまった、今は反省している
私は昔から執筆活動に興味があって、書こう書こうと思っていたのだけど、どうにも億劫で遂に今にいたってしまいました。
この作品は、そんな自分の背中を押すために書いた作品です。
つまり見切り発車です。
ですので、いきなり更新がなくなったり、展開がおかしくなったり、数々の矛盾があると思いますが、なんとか完結させてやりたいと思っております。
どうか生暖かい目で見守ってやってください。

感想なんかを送ってだされるととても嬉しいです、厳しい意見もどんとこいです、よろしくお願いします。

怪物の在り方（前書き）

とりあえず投下、誰かが読んでくれたらうれしいです。

怪物の在り方

「っっっ・・・・・・・・・！！！！」

危うく叫びそうになって、何とか声を押さえつける

相手は見たことも聞いたこともない化け物、叫ぶ事で警戒させる事が出来るかもしれないが、それが発端になってすぐに殺される可能性の方が高い

命の危機に瀕したことで、死んでから今までいまいち回転の遅かった頭が、いつもより速く回り出す

痛い、熱い、痛い、嫌だ、いたい、イタイ、アツイ、イヤダ、イヤダ、イヤダ、

左手で右肩付近を握り、一応の止血をする

右肩から心臓の鼓動に合わせて血が吹き出す、嫌な汗が全身から吹き出す

いやだいやだイタイイタイイタイイヤダアツイイタイ

今までだってこんな絶体絶命を生き延びてきたんだ、大丈夫、きっと生き延びる可能性は残ってるはずだ！

太陽に向かって走り出す、と同時に化け物がこちらに飛びかかってきた

イタイイタイイヤダイヤダナンデイヤダイヤダツライイタイ
体の大きさに見合わずとんでもなく速いっ！僕の全力疾走の2倍ぐらいの速さだ
木々を盾にしながら、できる限り不規則に走り太陽を目指す
イヤダイタイいたいいたいたい痛いよぅ・・・
大量の出血のせいで頭がくらくらする
化け物は僕を追い詰めるよう、僕の通った跡そのままに着いてくる
大丈夫、しっかり冷静に考えればきっと生き残れる
時々背中に掠めるような感覚があるが、振り返らない
痛いよ、熱いよ、寒いよ、辛いよ、痛いよぅ
大丈夫、この先にきっとあそこがある
化け物の追撃を何度となく避けながら、目的地をようやく見つけた
僕は遂にあの美しい崖までたどり着いた
僕が振り返ると化け物がこちらを不満げに見ていた
大丈夫、勝負は一瞬だけど、速さは僕より少し速い程度、大丈夫
僕は自分に少し嘘を吐きながらタイミングを図る

・・・化け物が笑った様な気がした

瞬間飛びかかってくる化け物

僕は奴の股の下を滑り抜ける

野球のスライディングの要領で股下をくぐり抜け、化け物の尻目掛けて蹴りを放つ！

弱者が使う強者に勝つための常套手段、それは他の力を使う事

例えば敵の力、例えば重力、例えば相手の油断、それらをフルに使って初めて弱者は強者に勝てる

これで決まればよかったが、僕の蹴りは空を切った

僕が的外れの蹴りを放った訳じゃない

怪物が、僕の認識できる速度よりはるかに速く動いて視界から消えたのだ

音を便りに右を向くと、やはり奴は笑っていた、僕を嘲笑っていた

そうだ、奴は僕が五感で認識出来ない程の速度で、僕の右手を奪っていった

これまでの追いかけっこは、奴にとってはただの遊びだったのだろう

駄目だ、失敗した、おわりだ、しぬ、しんじゃう

ならば次は、さらにこの命を賭けるのみ！

僕は崖に向けて駆け出し、飛んだ

あの川の所に落ちれば、もしかしたら生き延びれるかも知れない

しかしその希望も、すぐに打ち砕かれる

いつの間にか怪物は僕の後ろに立っていて、飛んでいる僕の足を掴んだ

そしてそのままゆっくり振り上げ、反対の地面に叩きつける

咄嗟に左手で頭を守ったが、脳が揺れる、体が軋む、口の中に血の味が広がる

怪物は握っていた僕の右足を根元から握りつぶした

痛いいたいしぬしぬしぬしぬシヌシヌシヌシヌシヌシヌ

僕は奴の手を左足で蹴り、反動で距離を取る

しかし怪物の遊びは終わったのか、即座に近づき拳を僕のお腹に向けて振り落とした

左足で拳に対抗しようとするが、難なく縦に押しつぶされた

その反動で少し距離が取れたが、もはや僕の命は風前の灯火、春の夜の夢だろう

シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌイヤダイヤダイヤダ
怪物は満足気に僕に近づいて、右手の掌を僕に近づける
万策尽きた僕が思うことは、ただただ一つ
一矢報いてやりたい、何か奴に、少しでいい、蚊に刺され程度でいい、せめて、一矢
左手を動かし、火事場のバカ力で奴の手に噛みつく
僕の足の骨が僅かに手に刺さっていたのだ
そこに全身全霊死ぬ気で噛みつく
奴は少し驚いた様子で僕の左腕を掴み、自分の右手から僕を引き離そうとして、勢い余って僕の左腕を握りつぶした
僕はそのまま放り投げられて中に浮かぶ
世界がスローモーションになる
走馬灯という奴だろうか
色々な事が思い浮かび、それと同時に思考も加速する
死んだと思ったらすぐにまたＧＡＭＥＯＶＡＲか
まああの美しい崖の方に投げ捨てられたんだから上等か

僕は奴から出た僅かな血と噛み千切った皮を飲み込んだ

シヌ？しぬ？死ぬ？死んだ？もう死ぬの？死にたくない死にたくない

いや～我ながら最後の抵抗は見事だった、うん

なんてったって奴に血を出させたんだから、普通の人間にゃ出来ないぜ

よくがんばったよ僕、えらいえらい

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

僕はゆっくり崖に向かって放物線を描く

崖の端に生えている木の枝の下をもうすぐ通り抜ける

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

・・・僕の本能はまだ諦めてないみたいだな

あの枝、手を伸ばせば届きそうだな

まあ伸ばす腕がないんですけどね

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！

腕があれば、もっとあの化け物に、痛い目に合わせてやれるのに

足があれば、もしかしたらあの化け物から逃げられたかもしれないのに

目に小さな小さな村が見える

あそこに住んでる人たちは、この化け物に対抗できるのかな

もし生きてたら、ここに危険な化け物がいることを警告できるのに

もっと強い腕があれば、もっと強い足があれば、もっと強い体があれば

・・・畜生、生きたいな

お腹の底が熱くなる、今の僕の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだろう

あの枝に届く腕が欲しい、あの化け物を蹴り飛ばせる足が欲しい、

無茶な行動に耐えれる体が欲しい！

死にたくない、生きたい、生きたい、まだ、生きていたい！！

気付けば僕は、枝を掴んでいた

怪物の在り方（後書き）

とりあえず主人公覚醒、次号待たれよ

一方的な在り方

脳が溶けそうになる程頭が熱い、意識が体を突き抜けたようだ
よく分からないけど、手足が元に戻ってる
化け物がこちらを見てる
だけど不思議と命の危機は感じない
世界はまだゆっくりなままだ

さあ、平穏を取り戻そう

化け物がそばにあった木をへシ折って上段に構える
そのまま僕に向かって振り下ろしてくる
僕は右手を頭上に持ち上げて、防御の姿勢をとる
今までだったら無事で済まなかっただろうけど、今なら
振り下ろされた木は、僕の右手に当たり、そこで止まった

木が僕と化け物の間でたわむ

化け物はそのまま力を入れつづけ、遂に木が折れた

その折れてギザギザになった断面を僕に突き入れる

僕はその先端を左手ではたく

それだけで狙いがズレて、その突きは外れた

化け物は僕と距離をとり、木を上空に投げた

木は空高く舞い上がり、僕の方に落ちてくる

と、同時に化け物が駆け出し、僕との距離を詰め、必殺の拳をくりだそうとする

僕は木が落ちてくるまでの時間を、のんびりと待って、化け物が詰めてくるのを待った

そして、化け物が拳を放った瞬間、一歩だけ前にでた

化け物の懐にはいった僕は、右手を化け物の胸の中心に、突き立てた

化け物は何が起きたのか分からない様だった

木が地面に落ちる大きな音がする

僕が、右手を捻りながら抜くと、化け物は三歩下がって膝を地面に

着けて、こちらを睨む

化け物は、最後の抵抗とばかりに走ってくる

僕はその頭を蹴り上げる

パンッという音と共に、怪物の頭が血飛沫に変わった

化け物はまるで僕を抱きしめるような姿勢のまま、僕に倒れかかり

やはり僕を抱きしめずに倒れた

体中に化け物の血が着いているが、僕は唇についた血を舐めとって

そのまま意識を手放した

～近隣の村～

（・・・ん!?）

何か、とてつもなく大きな力を感じた

山の方からだったが、見える範囲では異常はない

（ふむ？）

あれが魔法によるものだとしたら相当な規模だ

それこそ、山ごと村が吹き飛んでもおかしくはない

視界に入らない程遠くの出来事とは考え難い程の力の大きさだった

私は全神経を集中しながら山の方を警戒するが、異常は感じられない

・・・思い過ごしだろうか？

今の世の中、何が起きてもおかしくない

警戒のし過ぎと言うことはないだろう

今後、今少し警戒を強めよう

〵？？？？〵

・・・・・・パパ？

一方的な在り方（後書き）

え～実はこれで最終回です
嘘です、ここまでがプロローグです
まだがんばります！

ここでの在り方（前書き）

投下だぜ！

ここでの在り方

・・・・・？

・・・さ、寒い・・・・・？

・・けど、もうちょっと寝ててもいいよね

もうちょっと・・・

そういえば、布団はどうしたんだろ？

地面も若干固い気がする・・・

まあいいか、お休み～・・・

・・・

そういえば、怪物はどうなったんだっけ？

・・・ん？怪物？

「のわぁぁ～～～！！？」

一気に目が覚めた、そんな朝の一幕

叫んだ僕は急いで周りを見渡すが、怪物らしきものはいない

（ふぅ～～・・・）

とりあえず一息つくが、心臓はバクバク、大爆発寸前だ

（でも、死体らしきものすらないのは何でだ？）

不思議な事に、怪物の死体は消えていた

（もしかして、・・・夢？）

怪物がヘシ折った木の跡があったので、全くの夢ということはないだろうけど・・・

それに・・・

「この腕、どうなってるんだ・・・？」

そう、僕の腕は怪物と同じグレーの色をしていて、体との接続部分はグレーと肌色で複雑な模様を描いている

足も同様だ

とにかく、状況を整理すると

1、あの時僕は怪物に出会い、命からがらこの崖まで逃げてきた

2、両手両足を失いながらも反撃し、逃亡を試みたが、あえなく崖に放り投げられる

3、突然手足が生え、何故か負ける気がしなくなって、事実怪物に

勝利

4、その後意識を失う

・・・ふざけてるな、特に3番目

っというか怪物だよ怪物、ありえないよ

あんな生物いたら普通にテレビで放送されるよね

もしかしてUMA？未確認生物？

いやいやビックフッドは雪山に出るんじゃなかったっけ

ていうかここいらの植物も見たことないものばかりだし

そういえば僕、どうしてあんなに動揺してなかったんだ？

いくら何でもいきなり宙吊りにされたらパニクると思うんだけど

さらに言えば木から落ちた時も衝撃が全然なかったし

そうだ、怪物って1匹（？）なのかな？

あんなのが群れで襲ってきたら命がいくつあってもたりないよ！

次から次へと疑問が浮かんでは消えていく

だけど、その中で一番大事なことは

「・・・喉が乾いたぁ」

これである

昨日は全く欲しくなかったけど、今はとにかく一杯の水が欲しい

そういえば、崖の下に川が流れていた筈だ

崖を覗いてみると、やっぱり川があった

というかどうなってるんだ?川が僕の真下から流れてる?

とにかくあそこに行けば、水が飲めることは間違いなさそうだ

（さて、行くにしても、どうしたもんだろうか・・?）

崖は視界の端の方までずっと続いていて、迂回するのは億劫だ

普段なら絶対取らない手段だが・・・

（飛び降りる・・・か?）

今はこの腕と足がある

もしかしたら耐えれるかも知れない

とりあえず、垂直飛びをしてみた

ピョーン

・・・軽い擬音で表現し過ぎだけど、３ｍぐらい飛べた

正直、怖かったぁ～

しかし、崖下までは１００ｍ位はあるんじゃないかな・・・？

次はもう少し力を入れてみた

ビョン

ドスン

１０ｍぐらい飛べた、正直死ぬかと思った

・・・うん、いけそうダネ☆

僕は深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる

大丈夫、大丈夫、いざとなれば川に落ちればいいんだ、大丈夫

深く息を吸って、軽く助走をつけて、飛ぶ！！

えも言われぬ浮遊感のあと、もの凄い速さで落ちていく、落ちていく

股の間がキュッってなった

けど、ある程度すると、崖の下の壁が近づいてきて

そこに手や足を突き出し、減速しながら落ちていくと、だんだん楽しくなってきた

横に回転したり、縦に回転したりして遊びながら落ちていくと、地面が近づいてきた

僕は空中で前転しながらタイミングを計り、手と足を地面に叩きつける！

当たりに鳥の飛び立つ音が聞こえる、キマった！

ズボンのお尻が破れている事に気づいたのは、それからしばらく経ってからだった

川は初め、少しだけ滝になっていた

崖の下の裂け目から流れ出ているようだ

水は日本でも滅多に見れないくらい澄んでいて、逆に飲むのをためらってしまった

しかし、一口飲んで、あまりのおいしさにガブガブと飲みまくった

鋭く冷たく、どこか甘い、世界の名水１００に絶対エントリーすべきだ

結果お腹を下し、人生で初めて木に隠れて野〇ソをした

お父さん、息子はがんばって生きてますよ

そんなわけで、一息ついて、あらためて考える

いきなり森の真ん中にあらわた僕

襲ってきた怪物

生えてきた腕

全くもって分からないことだらけだ

幸いにも気温はそこまで低くなく、ここは影になっているうえに、短パンになってしまったズボンと、ノースリーブになったシャツや上着でも、ちょっと肌寒い程度で済んでいる

もしかしたら夏なのかもしれないが、有難いことである

あの怪物の返り血は、起きた時には跡形もなく消えていた、そこはラッキーだったのかも知れない

血染めの服なんて嫌だからね

そして一番気になることが、この地方に、いや、認めよう、この世界に僕の様な人間がいるかどうかだ

ここは、おそらく異世界なんだろう

怪物もでてきたし、腕も生えてきた、元の世界ではありえないことだ

あの怪物が、実はこの世界の人間にあたる存在で、崖の上から見た
あの橋も、その脇の人工物も、全部あいつらが作ったとしたら

僕はどうやって生きていけばいいのだろう？

とにかく、今、一番大事なことは・・・・

グゥ～～

一番大事なことは・・・

キュルルル～

一番大事なことは、腹が減ったということだ

ここでの在り方（後書き）

少年の冒険が、始まる・・・

メリー・クリスマスですね
そう、今日はイエス・キリストが死んだ日
人の死を祝うなんて、お前ら人間じゃねぇ！（タケシ風に）
知ってます、生まれた日なんですよね
私はこの3日間、仕事です
みなさんの幸せを願っています（＾３＾）／

サバイバルの在り方

前方８０m、目標、補足しました

（それでは作戦を開始する、３、２、１、ＧＯ！）

僕はできるだけ静かに、そして素早く、手足をゴムの様にして目標に近づく

（ここでやらなきゃ、僕が死んじゃうんだ！）

決して気付かれてはならない、少なくとも攻撃範囲までは・・・

その時、目標がゆっくりとこちらを向きだした

（クソッ！こうなったら・・！！）

僕は全力で足を踏み込み、

全力でコケた

派手な音がしたので、目標である犬っぽい猪はすぐに逃げ出した

ご飯を探して１時間、獲得数、ゼロ

「イテテテッ・・」

僕はご飯を探しながら川沿いを、下流に向けて歩いていた

所々木の実や食べられそうな草、キノコなどが生えてはいるが、前世の死因がキノコの毒なので、とても食べようとは思わない

それにこの体なら、きっと簡単に動物が狩れると思うんだ

・・・思い上がりだったみたいだけど

普通に歩いたり、走ったりする分には問題ないのだけど、元の自分のスペックを越える力をだそうとすると、なかなか思う通りにいかない

力が強すぎるんだ

下手に踏み込むと地面が砕けて、思うように動けないし

ゆっくりでは当然、獲物に逃げられる

攻撃手段は考えてあるけど、それにしたって近づかなければ当たりようがない

獲物を見つけるのはそんなに難しいことではなかった

この体になってから、視力も上がっているみたいで、普段なら見逃すような動物でも気付けるんだ

と、そんな時、鹿っぽいのが川で水を飲んでいるのを見つけた

（よし、今度こそは！）

僕はもう、気付かれずに近づくのを諦めた

もういっそのこと気付かれよう

気付いても逃げられないようにしよう

ある程度まで近づいて、

（いっせいの、せっ！！）

全力で立ち幅跳びをした

やはりというか何というか、この体、化け物である

目測４０ｍ程の距離を、一気に詰めて、目標は目前である

驚いた顔をした鹿がこっちを見ている

（ここであせっちゃいけない、秘密兵器だ！）

僕は右手に集めてあった小石たちを、軽く振りかぶって、投げた

超常の力で投げられた小石の群れは、目標に向かって亜音速で飛んでいった

すぐに逃げの体制に入っていた鹿の後頭部にＨＩＴ！

（よしっ！！僕が考えた必殺技、砕石銃（ロック・ショットガン）が見事に命中した！）

説明しよう、砕石銃（ロック・ショットガン）とは、当時中学生の僕が、もしすごい力を手にしたら、どんな技を使うかを考えた結果、コストと威力、命中率に

優れたこの技を思いついたのだ！

ありがとう、昔の僕！恥ずかしいぞ、昔の僕！

僕はガッツポーズを解くと、素早く獲物に近づくが

（あ～・・・）

見事に顔が消えていた

威力が強すぎたようだ

兎にも角にも食べれる様にしなければ

（とりあえずは、血抜きかな？）

後ろ足を持ち、頭を下にして、木の枝に引っ掛ける

ここに来て僕の枝に対する好感度は急上昇である、枝ｌｏｖｅだ、

子供が出来たら名前に枝という文字を一文字入れよう

（そして次は、内蔵の処理か）

魚を捌いた時の知識で処理をしようとするが、生憎包丁がない

僕は川にある石をいくつか割って、鋭利な物を作り出す

こうやって作られた物を打製石器と呼ぶ

本来はこれを研いで摩製石器を作りたいとこだが、間に合わせなのでこれでいいだろう

ビバ！社会科の知識！

とりあえず人差し指と親指に思いっきり力を入れて、毛皮に穴を開け、そこを起点に捌いていく

お尻の穴まで開くと、デロンと胃と腸が出てきた

口の方の端を指で取り出し、肛門のあたりは怖いので、丸々千切り取り、そのまま少し遠くに捨てる

他の内蔵も、生で食べれるところがあると聞くけど、わからないので全部捨てる

次は、皮を剥ごう

皮沿いに石器をいれると案外簡単に取れていった

足のあたりで止まったけど、面倒なので千切る

皮は川で洗って干した

もうそろそろ血抜きもいいと思ったので、肉を下ろして川で洗った

ぶっちゃけ作業中、何度か吐きそうになったけど、気合で乗り切った

っていうかなんでこんな真面目に解体してるんだろ？

これが日本人の性なのか

もったいない、もったいない

かまどは少し開けたところに適当に石で組んで、乾いた木を拾ってくる

動物が肉に寄ってきたので本気で威嚇する

かまどに木を組んで、真ん中に燃えやすそうな枯葉を据える

太めの木を手刀で割って、そこに枝を突き立て、回転させる

火おこしだ

最初は枝がすぐに折れて失敗

次は結構もったけどやっぱり失敗

そんなこんなで失敗しまくる

イラッときた

枯葉に木の粉をかけて、もう片方の割れた太い木を手に持ち

枝を突き立ててた木に、力任せに擦る、擦る、擦る！

流石怪物の力と言うべきか、少し火が出たのでそれを枯葉に近づけて火を大きくする

かまどに火が灯った

危うく満足しかけたけど、肉を適当な大きさに切って炙る

そして齧りつく

「う、うめぇぇ～～！！？」

なんだこれ、何だこれ！？

この世で食べた肉の中で一番おいしい！

僕は焼く手間が億劫になってきて、燃料の枯れ木と共に、何本か枝を取ってきて、火で軽く炙ったあと水で洗い肉を刺す

そしてかまどで一気に炙る

これほど原始的な焼肉があるだろうか

夢中になって焼きつづけていると

（あれ？やっぱりそんなにうまくない？むしろ味がない？）

調味料を一切使わない焼肉の味の無さに気付きだすのであった

サバイバルの在り方（後書き）

＊ここで表現されているサバイバルの仕方は作者の妄想です、実体験ではありません、注意してください

なんとなれば異世界だからでご勘弁を

初めての異世界人の在り方

僕は虫が集まってた肉を再度洗い、毛皮に包めるだけ包んで、残りは捨てた

その後、その場に手を合わせて川沿いを移動し始めた

とりあえず、橋を目指そう

僕は川の周りをピョンピョン飛びながら移動している

力が強すぎるので、普通に走るより、この方が効率がいいのだ

川が合流してだんだん大きくなる様を見ながら黙々と進んでいくと、日が沈んできた

この体なら今日中に着くかと思ったけど、上から見て思ったより、距離があったみたいだ

ひらけた所を見つけたので、ここで晩ご飯にしよう

かまどを適当に作り、枯れ木を集め、適当なサイズに折る

木を組んで、枯葉を置き、木と木を擦って火をつける

肉を炙る、食う

最初の感動は何処へやら、味気ない肉をよく噛んで食べる
肉が少し臭くなっていた
（結構大きな鹿だったのに、明日はもう一度、今度はもっと小さめのを狩ろう）
肉を森に捨て、寝る場所を探す
ふと、怪物に襲われた事を思い出す
あの時は必死だったけど、思い返すと恐怖が蘇ってきた
あの時もし勘に任せて避けていなかったら
あの時もし怪物が最初からずっと本気だったら
あの時もし・・・
考え出すとキリがないので、頭を振ってその考えを頭から追い出す
木の上、見晴らしがいいひらいてる場所、大きな石があり盾にして逃げるのによい場所
色々考えた結果、茂みの中に身を隠すように寝ることに決めた
鹿の毛皮を体にかけて目を閉じる
風の音が聞こえ、木々のザワめきが聞こえ、時々何かの動物の鳴き

声が聞こえる

闇の中でもよく見える視力を手にいれたとて、それは恐怖だった

朝起きたらこの手足がなくなってるんじゃないか

実はあの怪物は弱いモンスターで、もっと強いモンスターがここを襲ってくるかもしれない

あの鹿の肉は毒性を持っていて、じわじわと内部から破壊されてるかも

頭の中が恐怖に支配される

目標を持って動いていた時は隠れていた恐怖が、体中を脅かす

あの鳴き声は、僕を見つけた事を示しているのかも

実はあの怪物は僕の中にいて、人格を乗っ取ろうとしてるかも

もしかしたらこの夜は明けないかも

結局その夜は、あまり眠れず、うとうとしていたら夜が明けた

引き続き川沿いを移動する

偶にこちらを追いかけてくる獣がいるが、無視だ

あまりおいしくなさそうだったからだ

ちょっと大きめの兎のような動物を見つけたので、朝昼兼用のご飯にする

今度はうまくいったのか、殆ど生きていた状態とかわらない肉を手にいれた

炙って食べた、なかなかおいしかった

皮や余った肉は捨てた、手を合わせて後、移動する

速く、速く、できるだけ速く

それだけを思い移動する

最初に比べれば、天と地程の差がでるほどの移動速度だ

日が真上に登り、傾きだしたころ、ついに僕はたどり着いた

「橋だ・・」

お世辞にも立派とは言えないけれど、川を渡れるように、橋ができていた

「人工物だ・・・！」

嬉しさを爆発させながら、橋に近づいて作りをみる

どうやら石を組んで、その上に丸太を乗せて作ってあるようだ

幅はバスが一台通れるかどうかとういう程度

橋の上に立ち、辺りを見渡す

そう、橋があるということは、

「道だぁ～～っ！！」

道があるということだ

僕は迷わず上流から見て右に歩き出す

人にあったらどうしようか？

僕は受け入れてもらえるだろうか？

そうだ、言葉は通じるかな？

鼻歌でも歌えそうな気分で歩き出す、急ぐ必要はない

もうすでに、目に見える所に村があったのだ

そうしてだんだん大きくなっていく村に、ニヤけた顔が隠せなくなってきた時、それを見つけた

（人だ！）

怪物より遥に小さいが、僕より少し背の高い人が、門の入り口でこちらの方を見ている

僕は走り出しそうな体をぐっと抑えて、でも締まりのない顔のまま歩き出す

（よかった！人がいた！よかった！よかったぁ！！）

近づきながら、初めはなんて言おうか考えていると、相手が僕を見ているのがわかる

村人Ａの２０ｍ程手前に差し掛かった頃、向こうが話しかけてきた

「それ以上こちらに近づくな、この魔物めが！」

臨戦態勢の村人Ａを相手に、僕の顔が凍りついた

初めての異世界人の在り方（後書き）

主人公、名前すらでてないのに、不憫です

というか魔血を吸ったのまだ一度だけですね、次まではもう少しかかります、タイトル詐欺・・・？いやいや

村へ入る人の在り方（前書き）

一応ギャグパートです

村へ入る人の在り方

村人Ａは、頭巾の様な物を被り、口と鼻を覆う様にバンダナを巻いており、顔だけ見ると忍者のようにもみえる。

服装はゆとりのあるズボンの裾を糸で絞め、動きやすくしてあり、上はタンクトップの様な物を一枚着て、腕を露出していた。

右足を前に踏み出し、左手を鞘に、右手を柄に掛け、今にも抜刀しそうな様子である。

「ま、待ってください、僕は魔物などではありません！話を聞いてください！」

村人Ａは眉をひそめながら言う。

「ほう、人語を解すのか、しかしながら何をもってお主を魔物でないとする！？」

僕は必死になって考えて、まずは相手の認識を確認することにした。

「そ、その前に何故僕を魔物だと思ったのですか？」

「フン、そんな事は見れば分かる！まだ日も高いのだ、見間違う筈がなかろう！」

いくつか思い当たる節があったので、聞いてみる。

「この腕のことですか？」

「確かに腕の色と顔の色が違うが、肌の色など関係ないわ！」

「では、髪の色ですか？」

「黒髪なんぞ何処にでもおるわ！！」

僕は若干ヤケになって叫んだ

「鹿の皮を腰に巻いているからですか！？」

「いやそれはお主のセンス次第じゃろ・・・」

若干呆れられた
しかしもうこれ以外に、外観で魔物と満たされるような事を思いつかない
どうしようも無いので正直に聞いてみた

「では何故僕を魔物と思ったんですか！？」

「そんなものは目を見ればわかる！」

・・・え、このおっさんもしかして犬好きに悪い人はいないとか、そういう事を言っているのだろうか？
失礼だけど、ワシの目に狂いはないとか、直感で物事決めつけちゃうタイプなのだろうか？

そんなことを考えていると、おっさんが続けて言った

「その、血のような紅い目を見ればなっ！」

「えっ？」

訳がわからなかった、僕は典型的な日本人の外見だったはずだ
肌は黄色、髪は黒、瞳も黒く、背もそんなに高くない

「ちょっと待ってください！僕の目の色は黒ですよ！？」

「たわけたことを！その目は、その目の色は、儂が何度も殺してきた魔物たちの目と同様の紅色ではないか！！」

思い出してみる、川で顔を洗ったときのことを
少し自分の目元が赤い気がしたが、川は常に揺らいでいてよく見えず、充血しているだけだと思った
その後すぐに頭を洗ったし、やることがあったので確認しようとも思わなかった
こっちの世界に来たときに持っていた物は服だけだったので、鏡の類で確認も出来なかった

僕の目が、紅い？

あの、怪物みたいに？

「しかし人語を解する魔物など、話にしか聞いたことがなかった、そういった魔物は隠れているか、やたらと強いと聞いたが、・・・ん、おい、どうした？」

おっさんが何かを言っているが、僕はもう限界だった
この世界に来てから碌な事がない
いや、来るちょっと前からか

何故こうも理不尽な事が押し寄せてくるのだろう
僕はただ、普通に生活していただけなのに
ただ、普通に生活していきたかっただけなのに
何故、何故、なぜ・・・
頭の中がぐちゃぐちゃになる
溜まりに溜まったストレスが、溢れ出す

「・・・・っ！」

「どうしたんだ、ん？ヤルのか？いいぞ、かかってこい！この村は儂が守るぞ！」

僕は膝を地面に着き、上を見上げ、

「びぇぇぇ～～～～ん！！」

泣いた、そりゃもう盛大に
人目など知ったこっちゃない
もう限界だったのだ、色々

「お、おい、ほんとにどうしたんだ？わ、儂が悪いのか？」

「ウワァ～～～ン！ア～～ン！」

「ううう、子供なんぞ育てたことがないからどうすればいいかわからん！カミさんに全部任せすぎたか・・」

「えぇ～～～ん！ギャ～～～ン！」

「ほ、ほら、怖くないぞ、ん、大丈夫だ、お主も男じゃろ？どうじ

ゃ、ここらで泣き止まんか？」

僕は泣いた、泣き続けた
おっさんが何か言ってるが取り合わずに泣き続けた
しばらくして段々と落ち着いてくると、おっさんが言ってることが聞こえる様になってきた

「悪かった、悪かったから、いったん村に入ろう、な？あんたは魔物じゃない、わかったから、な？」

「グスッ、グス・・・」

気づけばおっさんはすぐ近くにいたので、手を差し出す

「ん？手を引いていけばいいのか？そうか、とりあえず行こう」

おっさんに手を引かれ、歩き出す

ずっと下を向いて泣いていたのでよくわからないが、村に入り、建物に入ったようだ

「お～～い、客だ、宿を頼むっ！」

しばらくして足音が聞こえだした

「あらあらまあまあ、もう客は来ないもんだと思ってたよ、その子がお客さんかい？」

「ああ、門の前で見張りをしていたら、橋の方からやってきて、あまりに怪しいもんだから魔ｎ「グスッ」いや、こいつは人間だ、

うん」

「なにいってんだい、確かに不思議な形（なり）だけど、どう見たって人だろう？」

「いや、村の見張りとしてはだな、あやｓ「とにかく、客なんだろう？」はい、そうです」

「なら構わないさ、そこの若人！いらっしゃい、ゆっくりしていっとくれ」

久しぶりに、人の優しさに触れた気がした

村へ入る人の在り方（後書き）

補足として、おっさんの瞳は黒色です
おそらく次話に説明をいれます
→駄目でした、その次に入れます

本当はもっと早く執筆したかったのですが、飼い猫に邪魔されました
おのれ、かわいい顔しおって、かわいいじゃないか
その後、3時間程時間を盗まれました

おかみさんの在り方（前書き）

アクセス解析という物を知りました
２００人以上もの人が、この小説を読んでくださってたと知って、
恥ずかしいやら嬉しいやらで大変です

もし気に入っていただけだら、今後ともよろしくお願いいたします。

おかみさんの在り方

泣き疲れた僕は、部屋に案内されるとすぐに眠りに落ちた
目が覚めた僕は、定番のセリフを言おうとして、
「知らない天井・・・でもないのかな?」
やっぱりやめた

たかだか3日ぶりだというのに、随分久しぶりにゆっくり寝た気がした
ベットは元の世界程柔らかくないが、地べたとは雲泥の差だ
体が少し痛いのは、多分別の理由だろう

「ん〜〜・・・っ!はあっ・・・」

僕は伸びをして窓を見た、もう日が昇り始めてるみたいだ
ドアを開けて、廊下に出て、階段を目指す
壁は煉瓦で、日本にはない情緒が感じられる
二階の部屋から一階に降りる

そこで、この宿のおかみさんに出会った

「おはようございます」

「あら、おはよう!随分とよく眠れたみたいだねぇ、顔を洗うならそこの角の扉から出て、直ぐにある井戸を使っておくれ」

「いやぁ、ありがとうございます」

よく考えると、日が沈む前に寝て、日が昇ってるってことは、１２時間以上寝ていたってことか
そりゃあ体も痛くなる訳だ

井戸は滑車が付いていて、ロープの先のバケツを下ろして、水を汲みあげるみたいだ
バケツの水を桶に流し入れて、顔を覗き込むと自分の顔が写っていた
その顔は泣き腫らしてむくんでいたが、その瞳は、

「ははっ、本当に紅いや・・・」

まるで映画に出てくるヴァンパイヤみたいな紅だった

顔を洗い、口をゆすいで、ついでに頭も洗っていると、おかみさんがやってきた

「ほら、タオルだよ」

「ありがとうございます」

礼を言ってタオルを受け取り、顔と頭を拭く

「お客さんにこういっちゃなんだけど・・・」

おかみさんが言う

「？どうされました？」

「あんた、ついでに体も拭いちまいな、ちょっと臭うよ」

繊細な男子高校生の心は、痛く傷ついた

「でも、替えの服がないんです」

「見りゃわかるよ、私の旦那の服を貸してあげるよ」

おかみさん、助かります！

少し（実際にはかなり）ダブダブな服を貸してもらい、そでや裾を折って着る

「しかしあんたも妙ちくりんな服を着てたねぇ？なんだいこの袖口？まるで腕ごと引きちぎられたみたいじゃないかい？」

腕ごと引きちぎられたんです

「しかもこの留金、よくこんな精密なもの作ったねぇ、あんたどっかの貴族さんかい？」

ただのジッパーです、ユニ〇ロで買いました

「いや～、あっはっはっは～」

僕は笑ってごまかした

「それにしても、お腹、減ったんじゃないかい？」

言われて気付く、すごくお腹が減っていた

「どうだい、ちょいと多めに朝飯、作っといたよ」

おかみさん・・・一生ついてきます！

メニューは米とシチュー、サラダにスープが付いていた
見るからにおいしそうな湯気を立てる料理に、生唾がとまらない！

「それでは、いただきますっ！」

「はいよ！」

おかみさんが苦笑ぎみに言うのを聞かず、ガッつく！
久しぶりのまともな食事だ！
シチューはそれぞれの野菜がとろける寸前まで煮込まれており、野菜本来の甘味と、牛乳（？）の甘味が絶妙に絡み合い、さらにこれに米の食感が相まって想像を絶する程うまい
所々にある肉も大ぶりに切られており、最初に焼いてあるのか肉汁が中にたっぷりと詰まっていて、これがなんともいえずうまい！
喉に詰まりそうになりながら、実際に詰まりそうになるとスープに手をだす
こちらはあっさりと塩味なのだが、どこか懐かしく、温かみのある味で思わず笑みがこぼれる
サラダも鮮度がいいのか、ドレッシングも最小限しかかけられていないにもかかわらず、シャキシャキした歯ごたえと酸味、食べた後の爽やかさがなんともいえない味をだしている

「そんなに急いで食べなくても、誰も取りはしないよ」

おかみさんがニコニコしながら言うが、しったこっちゃない

茶碗が空になったのを見て、おかみさんが言う

「おかわり、いるかい？」

僕は無言で茶碗を突き出した

僕は散々食べに食べて、食後のお茶もいただくことにした

「いや～見事な食べっぷりだね！作った甲斐があったってもんさぁ」

おかみさんが呆れまじりに言う

「いや、本当においしかったんですって、特にあのシチュー」

「あれはうちの宿特性のシチューでね、昔はアレを食べるためだけに来た客もいたんだよ」

そういって笑う顔に、どこか影があるのが見て取れた

「そういえば、他のお客さんは・・・？」

不思議に思っていたのだ、起きてから一度も他のお客さんに会っていないのだ

それに、おかみさんは僕に付きっきりで、他に仕事もしていない

おかみさんはどこか寂しげに言う

「そりゃあんた、こんな村に来る物好きは、そうそういないよ」

いまいち話が見えなかった僕は首を傾げた

「昔はよかったさ、ライドに行くには絶対にこの村を通っていったからね、そりゃ宿も必要になってさ、毎日忙しくしてたもんだよ」

僕は疑問を口にした

「何か、あったんですか？」

おかみさんは驚いた様子でこちらを見て、言った

「何があったってあんた、ライドが滅んだんだよ、おまえさんも知ってるだろう！？」

そうだった、僕はこの世界の常識がないんだった

そんな時はやっぱりこれだよね！

「僕、記憶がないんです・・・」

伝家の宝刀、記憶喪失！

そして僕はおかみさんに、嘘とほんとをまぜこぜにして伝えた

・気付いたら森の中だったこと

・怪物に襲われたが、命からがら逃げたしたこと

・川沿いに歩いていて、橋を見つけたこと

怪物を倒したことと、腕が生えてきたことは伏せた

「はえぇ～、あんたも苦労したんだねぇ～・・」

おかみさんは目を丸くしたが、特に詳しくは聞いてなかった

「なんだい、じゃあ今この村が、人間が住んでる地区の一番端の村だってことも知らないのかい？」

うん？どういうこと？

おかみさんの在り方（後書き）

できるだけ毎日更新を心がけていますが、これってやっぱりなかなか辛いですね
他の方がすごい長い間してるのを見てたので、頭が下がる思いです

しかし、一度走りだした以上は完走を目指します！とりあえずは主人公が無双するまで毎日・・・できたらいいな～
燃えあがれ！俺の小宇宙（コスモ）！！

取り繕いの在り方（前書き）

前に２００人以上が見てるといったな、あれは嘘だ（コマンドー風に多分ですが正確には７０人以上だと思います、間違えた、恥ずかしい・・・／／／／

取り繕いの在り方

おかみさんに聞いて分かったことをまとめると、
・世界は今、魔物に侵略されて、人が住める場所が限られている
・ライドというのはこの村の隣にあった国（街？）で、少し前に滅ぼされている
・今残ってるのはイーアという国だけ
・橋の方に行くとイーアがある
・昔はそれこそ、大陸中に色々な国があって、人がたくさん暮らしていた
・魔物の侵略は、２００年ぐらい前から起きだした
こんな感じだ

「そうなんですか～、２００年前より以前には魔物がいなかったんですか？」

「いや、いたよ、ただ好んで人を襲ってくるのはそんなにいなかったって話さ、それが徒党を組んで襲ってくるようになったのがだいたい２００年前なんだとさ」

う～ん？何が原因なんだろう？

「中には魔物をまとめる魔物の王が生まれた！って言ってる人もいるけど、実際に見た人はいないそうだよ」

・・・もしかして、僕が呼ばれたのってその魔王を倒すため、とかじゃないよね？

「まあ何にせよ、この村ももうお終いだろうねぇ、住人はみ～んな

逃げちまったし、残ってる連中も、覚悟の上さ」

・・・僕が、魔王を倒せるかも、なんていったらどんな顔をするだろう？

「なんだい人の顔をジッと見て、いくら美人だからってそんなに見るもんじゃないよ」

いや、流石に年齢差が、ゲフンゲフン

「とにかく、あんたも早いとこ逃げた方がいいかもね、いつ魔物が襲ってくるか分かったもんじゃないよ」

「そのために、儂がおるんじゃがな！」

いつの間にかいたおっさんが、話に割り込んでくる

「なにいってんだい、あんた一人でどうにかなるなら、国が滅びたりするもんか」

「じゃがこの村一つくらいならなんとかなるじゃろう、期待せずに見ておれ」

おかみさんが胡乱な目でおっさんを見て、おっさんが快活に笑う

「仲のいいご夫婦なんですね」

僕はポツリと呟いた

おっさんとおかみさんが目を合わせる

「だそうだが、どうじゃ、儂と一緒になるか？」

「冗談でもよしとくれよ、私には旦那も息子もいるんだよ」

「え、夫婦じゃなかったんですか」

「誰がこんなボケオヤジと」

おっさんはまた笑っている

「それにこのオヤジにも子供と奥さんがいたはずだよ」

「いたってことは」

「・・・儂は、生まれも育ちも、ライドなんじゃよ」

・・・沈黙が生まれた

「なに、今の世の中よくある話じゃ、気にすることはないぞ？」

おじさんは、笑顔のまま言う

「あ～すまん、なんじゃ、そうじゃ、お主、名前は何というんじゃ？」

「僕の名前は一命（にのまえみこと）です、ミコトと呼んでください」

「儂の名前はダイジじゃ、よろしくの」

「あれ、あんた、記憶喪失じゃなかったのかい？」

あ、やっちゃった・・・？

「記憶喪失じゃと？」

「あっはっはっは、名前は覚えていたみたいです」

その後、ダイジさんにも自分の状況を説明する

「ほ～、だから魔物の特徴も知らんかったんじゃな」

「そうなんですよ～」

「ではなんで、自分の瞳を黒だと思っとったんじゃ？」

痛い所を突かれた僕は、必死に頭を回らせる

・・・そうだ！

「いや、だってダイジさんの瞳が黒かったから、同じだと思って」

・・・く、苦しいか・・・？

「ふ～ん、まあいいわい、とにかく、魔物の特徴は知っておいて損はない、聞いておきなさい」

そういってダイジさんは魔物の特徴を話し出した、以下まとめ

・体色は黒っぽいのがほとんどだが、あまり統一性はない

・最大の特徴は目が紅い事

・体形においては多種多様で、これによって判別することは不可能

・絶命すると、特別な例を除いて気体になって消え失せる
・人を執拗に狙う物が多い
・血液や肉体は猛毒で、口に入れてはいけない

「気体にならない特別な例っていうのは・・・？」

「ああ、それは実際に見た方が早いんでないかのう？ところでお主、金は持っとるか？」

あ、そういえば宿代どうしよう・・・！？

「お、おかみさん、どうしましょう！？僕一銭も持ってませんよ！？」

「ああ、宿代の心配をしてるのかい？いいよツケで、どうせ最後の客だしさ、気にしなさんな」

「そういう訳には・・・！そうだ、僕、力には自信がありますよ！力仕事は任せてください！」

「いや、そういわれてもねぇ」

「ほう、力に自信があるのか、ならなおさらだ、どうだミコト、ちょっと付き合わないか？」

ダイジさんに言われて、僕はとりあえずついていく事にした
宿を出ると、昨日は見れなかった街並みが広がっていた
左右に幅の広い道が続いていて、その両隣に宿が並んでいる
所々、酒屋や問屋があって、ここが宿場町だというのが一目で分かる光景だった

しかし、そのどれもに活気や人気がない
さっきおかみさんが言っていたことは本当だったようだ

しばらく門の方に歩いていき、脇道に少し入ったところでダイジさんが言った

「儂の家だ、本来は違うのだが、村長の温情でここに住まわせてもらっている」

そういって入っていった家の中は、イメージと違って清潔感があり、物が理路整然と並べられていた

「とりあえず、お主、武器は何を使う？」

言われても、武器など使ったことがない僕は答え様がなかった

「なんじゃお主、そこは記憶喪失なのか？」

なんだか呆れられてる気もするが、どうしようもない

「とりあえず持ってみよ」

そういって剣を渡されたが、いまいち構え方がわからない

「駄目そうじゃな、ではこれは？」

今度は槍だけど、結果は同じ
その次は弓を、その次はナイフ、その次は鈍器を渡されたが、どれも結果は同じだった

「これも駄目か、お主、もしや過去に一度も戦ったことがない、なんてことは言わないわな？」

はい、その通りです、とは言えず、黙る

いや、あるぞ、戦ったこと

「い、一応戦ったことはあります、素手で、ですが・・・」

怪物と戦った時は、確かに素手だった

「素手じゃと？遥か昔はそういったこともあったと聞くが、・・・大丈夫なのか？」

「た、たぶん・・・？」

正直これからすること次第なのだが、この流れからするに・・

「まあなんとかなるじゃろ、では、森に行くぞ！」

やっぱり狩りなのか～！？

取り繕いの在り方（後書き）

これでようやく主人公の名前がでました！
ミコト君は嘘をついた事があまりないので、ボロでまくってますｗ

魔物狩りの在り方

僕は今、かご付きの背負子とナイフ、ロープなどが入った袋を渡され、門の前にいる
そこで準備体操を始めたダイジさんに倣って、僕も準備体操をしていたのだけど・・・

「よし！では、参るか！」

そういうと、ダイジさんはすごいスピードで森の中に走っていった

「ほら、ついてこ～いっ！」

そう言われて、慌てて僕も走り出す

「ほっほっほっほっほ～！」

ダイジさんは僕の想像を遥に越えたスピードで走っており、昔の僕ならすぐに置き去りになっていただろう
正直ダイジさんを侮っていた、もしかしてこの世界の住人はみんなこうなのだろうか？
必死になってついていくが、川沿いを走るのと違って木々が邪魔で、なかなかスピードに乗れない
対してダイジさんは、まるで木々が存在しないかの様に、するりと走り抜けてゆく

「どうした？そんなに力んでおると、体力がもたんぞ～？」

「だったらもっとスピード落としてくださいよ～！」

いいながら必死についていくこと15分位、ようやくダイジさんが立ち止まった

「ふむ、このあたりでよかろう」

ダイジさんは腕に巻いていたバンダナの様なものを口と鼻を覆う様につけだした

「よいか、魔物がでるような場所では、極力口と鼻を覆わねばならぬぞ」

「？なんでですか？」

「お主、話を聞いておったのか？」

う～ん、ということは魔物の特徴と関係があるのかな？

「魔物の血肉は人には猛毒だ、返り血が口に入って死ぬ者も少なくないんじゃよ」

「だから口と鼻を覆って侵入を防ぐのですね？ですが、傷口からの侵入はどう防ぐのですか？」

「うむ、何故かは知らぬが魔物の毒は傷口に対してはあまり効かんのじゃ、だから、とりあえずは口を覆っておればよいぞ、ほら、袋に入れておいたバンダナを巻くのじゃ」

言われて袋を調べると、ダイジさんと同じような布があった

急いでそれをつける

「よし、では早速じゃが・・」

魔物狩りか？

「採集を始める！」

・・・どうやら違うらしい

それからしばらくは食べられる物や毒になる物、薬草や有益な物の見つけ方を教えてもらいながら過ごした

「よいか、この薬草は、傷口につけるだけでよい、そうすれば直ぐに傷が治るぞ」

「よいか、このきのこは食べてはいけない、手足が痺れるぞ」

「よいか、緊急時はこれも食べられるぞ、ただし不味いから持って帰る必要はない」

よいか、よいか・・

そういって様々な事を教えられる

頭がパンクしそうになりながら必死に覚えていると、ダイジさんが遠くを見つめだした

「む、どうやらお出ましのようじゃ」

見ると、狼のような真っ赤な目をした獣が、こちらに近づいて来ている

「とりあえずは見本を見せるとしよう、お主は下がっとれ」

そういってダイジさんは一歩前にでた

腰に刺していた刀を抜いて、構える

狼は依然、近づき続ける

そして、狼がダイジさんの一刀一足の間合いに入ると思われる、寸前！

「セイッ！！」

ダイジさんが動いた、初動が全然見えない！

一瞬の内に狼と交差したダイジさんは、攻撃の姿勢を保ったまま、ゆっくりと振り返った

狼の首が殆ど体と繋がってない事に気付いたのはこの時だ

交差の瞬間に放たれた斬撃は、見事狼の首に吸い込まれていたようだ

「この様に、攻撃した後も気を抜いてはいけない、魔物の中には恐ろしく生命力の強い物もある、一瞬の油断が命取りじゃ」

しかし、狼はもうピクリとも動かなかった

「まあ大抵の物は首を刈れば死ぬ、しばらくして少しも動かなければ警戒を解いてもよいぞ」

「すごいです！正直一瞬すぎて何が何だかわからなかったですけど、

とにかくすごいです！」

「お主・・・まあいいか、と、忘れてはいかんな」

そういってダイジさんは狼に近づいていった

「何をするんですか？」

「いやなに、特別な例を見せようと思ってな」

そういうと、ダイジさんはナイフで牙を抜いて、手に持った

「この様に、必要だと思われる物を刈り取って、それを自分の物だと思い込むと」

徐々に狼が、黒い霧の様になって消え始める

そんな中、ダイジさんの手の内にある牙だけが残って、他は全て消えた

「ほれ、自分の物として残すことができるのじゃ」

そういってその牙を、僕の背負っているかごの中にいれた

「さあ、採集を再開するぞい！」

そしてしばらくして・・・

「む、また来おったな」

今度は角の生えた兎の様な魔物があらわれた

「では今度はミコト、お主が相手をしてみなさい」

そういって、ダイジさんは僕に視線を寄越した

「は、はい！」

僕はかごや余分なものをその場に置いて、一歩前に出た

兎はこちらを見て、様子を伺っている様だ

こちらもどうするか、様子を見ていると、兎が角を突き出しながら飛び掛って来た！

「ヒッ！」

・・・僕は左に飛んで避けた

「・・・お主、やる気があるのか・・・？」

ダイジさんは呆れた様子でこちらを見ている

「だっ、だって危ないじゃないですか！？」

僕はひたすら避けながら、その言葉に反抗する

「ヒッ！ホッ！ヘッ！フッ！トォッ！」

とにかく避けまくっていると

「ええい！いい加減にせんか！！」

ダイジさんの叱責が飛んだ

「う、うわぁぁ～～っ！！」

僕は叫びながら腕を前に構え、飛びかかってきた兎の角を掴んだ
兎は空中でジタバタもがいている

「うお～～っ！」

僕は角を持ったまま、その兎を地面に叩きつけた
1回では不安なので、2回3回と連続で叩きつけ続けた

「お～い、もうよいぞ～」

ダイジさんの言葉に気がついて、角の根元の方を見てみると
兎だった物が付着していた

「ヒッ！」

僕は腰を抜かしてしまったが、角を持ったまま、これは僕のだと念じた

兎が消えていく

「あれ？」

角も消えていった

「ふむ？どうしたのじゃ？ちゃんと念じておったか？」

「え？あ、はい、確かに僕の物だと念じていたはずなのですが・・・」

「ふむ、子供にもできることじゃし、どうなっているやら・・？」

言外に、子供にも出来る事が出来ないといわれているようで、落ち込んでいると

「いや、そういう意味じゃなくてな、出来てない訳はないんじゃ、ただ、なぜ消えてしまったのか、儂にもわからんのじゃ」

そう言われたので、少し気が楽になった

「しかし、もっとこう、戦い方をスマートに出来んかいな？こっちにまで血が飛んできたぞ」

そういってダイジさんは笑った

そして、僕の初めての、いや、２回目の魔物狩りはこうして終わった

魔物狩りの在り方（後書き）

このあたり、説明回が続いてます
矛盾が出来てそうで、ドキドキです

魔法の在り方

そうやって過ごしていて、太陽が真上に登ると、ダイジさんが言った

「よし、そろそろ昼飯にするかの」

「村に戻るのですか？」

「いや、とりあえず、罠を見て回る」

そういってダイジさんは歩きだした

しばらく歩いていると、ロープで逆さ吊りになった兎がいた

「ほう、それじゃこの兎を昼飯にするかの」

そういって兎の耳を持ってこちらに渡し、すぐにまた罠を張って歩き出す

今度は木々がなく、少し拓けた場所に来た

そこには、簡単に作られたかまどがあった

「では、兎を捌く、見ておれ」

そういってダイジさんはナイフを巧みに使い、見る見る兎を肉の塊にしていく

「こんなもんかの？」

そこにはスーパーで売っていてもおかしくない、お肉が出来ていた

「では、薪を拾って来てくれ」

「はい！」

僕は急いで薪を集めだした
すぐにもどると、ダイジさんはなにやら料理の下ごしらえをしているようだ
かまどの上には、いつの間にか鉄板が乗っていた

「では、料理をするかの」

そういってかまどに薪を組み、火をつける状態にした

「そういえば、どうやって火をつけるのですか？」

「どうやってって、魔法に決まっとろう？」

なんだ魔法か・・・、！？ま、魔法！？

「え、ダイジさん魔法が使えるんですか！？」

「なんじゃうるさいのう、使えるが、それがどうかしたのか？」

まるで使えるのが当たり前のような調子で言うので、もしかしたらこの世界では使えるのが当たり前なのかもしれない
それにしても魔法である、異世界と言えば定番とはいえ、実際に見るのは初めてだ

「ど、どんな魔法ですか！？見せてください！！」

「お、おう、なんじゃかすごく食いつきがいいのう?まあ見てなさい」

ダイジさんは両手をかまどにかざし、呪文を唱えた

『在りし日の炎よ、ここに再び熾(おこ)れ』

すると、かまどの薪の方から僅かに火の粉が上がり
結果かまどに火がついた!

・・・正直ショボい

「なんじゃ?なんで残念そうな顔をしとるんじゃ?」

「いや、なんというか、もっとこう、燃え上がる感じをイメージしていたので・・・」

「まあそういう魔法を使うのもおるが、儂は基本的にはこういったものしか使わんのう」

!いるんだ!そういう魔法を使う人!
顔が笑顔に戻った僕を尻目に、ダイジさんが料理を開始する

「まあ肉を塩で下味つけて、野草を適当に炒めただけ何じゃがな」

そういっていたが、野性味あふれるその料理は、塩も使わなかった肉の炙り焼きより遥においしかった

「ほれ、これも食べなさい」

そういってとても堅く焼かれたカンパンのようなものを渡された
最初は堅くて味もないが、じっくり噛んでいると、わずかに甘味があった

「それは非常食としても優秀なパンでな、森に入る時は常に持っとるんじゃ」

その後も少し採集をして、村に帰ることとなった

帰り道にて

「しかしお主、魔法については覚えておらんのか？」

「はい、これが全く覚えてません、ですので出来れば教えていただきたいのですが・・」

「うむ、しかし儂は正直な話、魔法にはあまり詳しくないのでな、村長に聞いてはいかがかな？」

「村長さんは魔法にお詳しいのですか？」

「いや、あの人は何にでも詳しいぞ？だから魔法に関しても知ってるはずじゃ」

そういった訳で、僕たちは村に着いた後、村長の家に向かう事にした
村長の家は、村を両断する道の真ん中あたりで、左に曲がると正面にあった

「お～い、村長さ～ん、いらっしゃるかの～？」

「フォッフォッフォッ、開いとるぞい、入ってらっしゃい」

家に入るとすぐにテーブルがあり、そこの奥に村長が座っていた
村長は顔にいくつもの皺を蓄えており、頭髪も白く、しかし背筋は伸びており、目はどこか神秘的な理性を感じさせた

「ふむ、お前さんがこの前きた、魔物に見える男の子かぃ？」

村長のいきなりの言葉にビクッとしたが、失礼がないようにできるだけ丁寧に話す

「お初にお目にかかります、私一命（にのまえみこと）と申します、先日からこちらでお世話になっております」

「フォッフォッフォッ、これはご丁寧に、ワシはこの村で村長をしておるラクシじゃ、よろしくのぅ」

村長は柔らかい笑顔をたたえながらそう言って、ダイジさんに視線を寄越した

「して、ダイジよ、何用かな？」

「はい、このミコト、記憶を失っているというので、色々と教えているのですが、魔法については儂は詳しく知らないので、村長にたずねてはどうかと思い、参った次第です」

「フォッフォッフォッ、そうか、魔法か、ワシもそこまでは知らんが、知ってる範囲についてなら、話そう、では、掛けられよ」

そういって村長は僕たちに椅子をすすめた

「では、魔法について話すとするかのぅ、実は魔法はわからないことだらけなんじゃ」

いきなりの発言に目を剥くが、黙って話を聞く

「皆が皆、当たり前の様に使うが、実際はどうして使えるのかわかっていないのじゃ。では何故魔法が使えるか、それは体を例にすると分かり易いかのぅ、お主は腕を動かす時、どうすればいいか分かるかのう?自分の腕は自分で動かせるのが当たり前で、何故自分で動かせるかはわからんのじゃ、昔犯罪者を実験台にして、それを解明しようとした者もおったが、腕の中にあるとある線を切ると、その先は動かなくなるというのはわかったが、実際にどうして動くかはついにわからんかった、それと同じで魔法もどうして通常ではありえない、超常の現象が起こるのか、誰にもわからん、しかし、いくつかわかっていることもある、・・・・」

長い、長いぞ、村長の話!

つまり、まとめるとこう・・・か?

・魔法は意志の力で使う

・呪文を使うのは、その意志を確固たる物にするため

・よって呪文は使わずとも魔法は使える

・身振りも同様

・使えない者はあまりいない、が、使っても意味がない程威力がない（火もつけられない）人が大体5割ぐらい

・そこに血筋などは関係ない

こ、こんな感じかな?

「・・・、まあ、そんな訳じゃから、魔法はとってもチャーミング

なのじゃ」

「は、はぁ」

「お主、聞いておったか？」

「はい！ダイジョウブです！」

「ならいいが、これダイジ、眠るでない」

「・・・ん、終わったのか？」

やけに静かだと思ったら、寝てたのか

「では、実際に使ってみるかのぅ」

そういって村長さんは指を突き出した

『灯れや灯れ、我が闇を照らせ』

そういった直後、指からチャッカマンの様に火が出てきた

数秒して、指から火が消えた

「ふう、こんなもんかのぉ」

「あの、ダイジさんと呪文が違うのですが、違う魔法なんですか？」

「お前さん、ホントに話を聞いておったか？呪文なんて人それぞれじゃよ、魔法も人それぞれじゃ、ようはイメージじゃ、イメージ、まあ人のを真似した方が簡単かもしれんな、実際に起こるというこ

とがわかっとるから、イメージがしやすいじゃろ？」

なるほど、では・・

「灯れや灯れ、我が闇を照らせ」

僕は指を突き出し、村長さんと同じ呪文を唱えた

「・・・あれ？」

しかし一切変化がなかった

「イメージじゃイメージ、体を突き抜ける程のイメージが、現実に変化をあたえる」

もう一度、今度は気迫を込めてっ！

「灯れや灯れ、我が闇を照らせっ！」

・・・何も起こらなかった

「うむ、まあ、使えずとも問題ない、そんな人はいくらでもおる」

村長さんが気まずげに、僕に労りの言葉をくれる

「まあ、なんだ、死ぬ訳じゃないんじゃ、気にするな」

ダイジさんが生温かい目で、こちらを見ている

・・・悔しくなんて、ないヤイ

魔法の在り方（後書き）

ついに来ました、魔法です
しかしここにきて、さらにジジイが倍！若い子が主人公しかいない・・・
因みにダイジは４０歳ぐらい、村長は７５歳ぐらいだと脳内設定してます

前兆の在り方

それからは朝起きて、体を洗い、朝ご飯を食べて、ダイジさんと森に入り、終わったら宿に戻て夕飯を食べ、寝る前に魔法を試すという生活サイクルが出来ていた

「・・・よし！」

ようやく魔物を狩るのにも慣れてきた
今はちょうどゴリラの様な魔物の頭を、平手でハジキ飛ばしたところだ

「しかしお主は、本当に異常な腕力だな」

ダイジさんにして、異常だと言わしめる力で魔物を殺すのだが、最近、魔物の血を見ていると、何故だか心がザワつく

キケンだ、キケンだ

と、本能が警告するのだが、魔物の血から、目が、離せない

「おい、聞いておるのか？おい？」

「・・・！あ、はい！大丈夫です！」

「ならいいんじゃが・・」

平穏な時間が、終わろうとしていた

「ダイジさんたら酷いんですよ～」

「それはわかったけど、これ、本当にもらっていいのかい？」

「もちろんいいですよ、僕が持っていてもなんの意味もないですから、もらってくれたら嬉しいです」

「ならいいんだけど・・・」

今僕は森から宿に帰ってきて、夕飯をいただいている
やはり何度食べてもここのご飯は美味しい、今日は魚料理だ
因みにおかみさんがこれ、と言ってるのは僕が森から持って帰ってきた物だ
魔物の部位だったり、食べれる野草だったり、フルーツだったり、時には見かけた動物を狩って持ってきた
せめてもの宿代の代わりだ

「そういえば、おかみさんは魔法、使えるんですか？」

「あたしは使っても意味がない質の人間だから、使えることは使えるけど、滅多に使わないねぇ」

「じゃあ料理とかはどうしてるんですか？火を起こす時とか」

「そりゃあんた、魔方陣を使うのさ」

「魔方陣？」

「そうさ、そいつを使えばあたしにだって火を起こすぐらいはできるさ」

「詳しく聞いてもいいですか？」

おかみさんの話によると魔方陣は、
・複雑な形をいくつか組み合わせて、意味のある陣を作り出すことで使える魔法
・使用者の魔法の素質に関わらず、同じ結果を出すことが出来る
・ただし少し気だるくなる

「まあ魔法を使うと気だるくなるのは、当たり前なんだけどね」

「そうなんですか？」

「魔法は意志の力で使うだろう？その意志の力ってのは使った後消えちまうのさ、だから何度も使うとやる気が起きなくなるのさ」

・・・村長の話より１００倍分かり易い！

「そうだったのか、僕は魔法が使えないのでわからないんですよ」

「なに、あたしは生まれてこの方魔法なんて５回も使ってないさ、それでも全然生活に支障はないよ、あんたも気にしなさんな」

「そうですよね、ありがとうございます！」

魔法の練習してるのバレてたのかな？

その時である

「ミコトさんはいますか！？」

宿に入ってきて、開口一番にこういったのは、僕も何度か見たことがある村の人だ

「はい！ここにいますよ？」

息を整えながら、その人は僕の元に歩いてきて、

「ダイジさんが呼んでます、いつもと逆の門で待ってるそうだ」

そう言った

「あ、はい、急ぎみたいなので、すぐに向かいます」

「ああ、そうしてもらうと助かる」

「じゃあおかみさん、また後で」

「あいよ、気をつけてね！」

ダイジさんが夜に僕を呼び出すなんて、はじめてだ

何があったんだろう？

・・・嫌な予感がする

僕は急いで門に向かった

門ではダイジさんが待っていた

「む、ミコトか、待っておったぞ」

「ダイジさん、どうしたんですかこんな時間に」

「いやなに、予感がするんじゃよ、何となくだが」

そこでダイジさんは少し躊躇して、だけどもはっきりと言った

「魔物の襲撃がある気がする」

魔物の襲撃、これによってダイジさんの故郷、ライドは滅びたという
その襲撃が、もうすぐ起こるってことか？

「儂は何度か魔物の襲撃を受けておる、その、前兆の様なものがわかるのじゃ」

「それって的中率は・・？」

「・・・・１００％じゃ」

言葉が出なかった、数多の国を滅ぼした魔物たちが、今、この村を襲おうとしている
・・・村が滅ぶ？
おかみさんも村長も村人も、ダイジさんも、みんな死んでしまう？

「どうするミコト、今なら逃げれるぞ？逃げたとて、誰も責めん」

「僕は・・・」

僕がどうするかは、決まっていた
みんな、僕を暖かく迎えてくれた

「僕はこの村を守ります、きっと、守ってみせます」

「・・・フン、そう言うと思ったわい」

ダイジさんは、どこか寂しげに、自嘲気味に笑いながらそう言った

「魔物はこの先、つまりライドからこの街道を通ってくるだろう、
数はわからんが、おそらくそんなに多くはない、この村が潰せれば
いいだけの戦力でくる」

「どうしてそんなことがわかるのですか？」

「勘じゃ」

・・・なんとも心許ない

「儂の勘を侮るでないぞ？それだけでこの戦場を生きてきたのじゃ
からな！」

カッカッカッ！っと快活に笑い、ダイジさんは僕を見た

「なに、儂とお主なら、何とかなるじゃろ！」

「またそんなこと言って、だからおかみさんにも相手にされないん
ですよ」

「それはそうと、お主の目、だんだん黒くなってきたな」

「え、本当ですか！？」

「ああ、いつか本当に真っ黒になるかもな」

「やった！そうしたらもう魔物と間違えられないぞ！」

「いや、お主は腕のこともあるからな～」

「なんでそういうことを言うんですか・・・」

そうやってくだらない話をしていると、僕の目に何かが写った

「どうやら来たみたいですよ」

「うむ、そのようじゃ」

無数の赤い目が、こちらにやってくる

「準備はいいですか？」

「誰に聞いとるんじゃ」

ダイジさんが刀を抜いて、構えをとる

僕の初めての戦が、始まる

前兆の在り方（後書き）

次回、大暴れの予感！

魔方陣は、ただこういうのがありますよ～っていう説明です

大晦日、のけものにされて暇なあなたに捧ぐ

襲撃の在り方（前書き）

新年明けまして、おめでとうございます！
これを読んでいる方が、少しでも幸せな新年を迎えられることを祈っております

襲撃の在り方

「うおおおおぉぉぉおっ！！」

見敵必殺（サーチ&デストロイ）！
僕は見て、即攻撃を繰り返している
適当に手足を振り回していても、当たれば当たった場所が吹き飛ぶ
のでダメージをあたえられる
魔物は死んでしばらくすると、消えてなくなってしまうので、死体
の山は出来ていないが、もし消えていなかったらいくつもの山が出
来ていただろう

対して、ダイジさんはすごく静かに佇んでいて、敵が間合いに入ると

・・・スパンッ！！

っと最小限の動きで敵を殲滅する
しかしその動きはあまりにも素早く、また隙がないため体に傷はなく
そして何より一撃必殺だ
魔物がタイミングを合わせて襲ってきても、

・・・シュパパパパンッ！！

っとまるで機械の様に両断してしまう
圧倒的な力を持つ僕と同じぐらい、いや、それ以上の魔物を倒して
いる
恐ろしい事に、これを1時間近くずっと維持している

・・・ダイジさんって、本当に人間ですか？

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・」

「大丈夫か？まだまだ敵はおるぞ？」

「まだ、まだいけます！」

「そうか、もう一踏ん張りじゃ！がんばれ！」

僕は体がうまく動かなくなってきて、精神的にも疲れてきたが、気力でなんとか状況を維持している

「後ろじゃ！」

「・・ッ！！」

いつの間にか背後に回っていた爪の長いコアラみたいな魔物に攻撃されたが、なんとか反応して、左手でガードするしかし、頬に僅かに切り傷ができる

「気をつけろ！背後に敵を回すな！！」

言われなくてもそうするつもりでいたが、集中力が切れてきたようだ

「・・ッァア！！」

根性で相手を叩き潰す

危険だ、危険だ、キケン、キケン、キケン

頭の中で、僕の本能と呼べる部分が警告を発するが、無視して闘い続ける
頭が大剣の先のようになったイノシシ型の魔物が走ってくる

「・・・っりゃ！！」

咄嗟に右腕でガードすると、右腕が僅かに切れた！
これまでどんな状況でも傷つかなかった腕と足が、初めて傷ついた

僕は動揺を殺して、左手でイノシシをハジキ飛ばす
もう殺すだけの力を込めることが出来なかった

象のような魔物の体当たりを両手で受ける

「・・っっっあ！！」

今まで力負けなどしたことがなかったのに、ハジキ飛ばされる

「ミコトォ！！！しっかりせい！！」

ダイジさんが激を飛ばすが、僕は起き上がれなかった

僕の、手足が消えていた

目の前にはまだ無数の魔物たちがいた

このままでは、

死んでしまう！

死ぬ？

こんなところで？

いやだ

いやだいやだいやだいやだいやだっ！！

鳥型の魔物が素早く近づいてくる

動ける範囲には、先ほど頭を握り潰した熊型の魔物しかいない

ハヤクハヤクハヤクッ！

その血が、頭を失った体に大量に流れ出ている

キケンキケンキケンキケンっ！

その血から、目が離せずにいた僕は、唐突に理解した

危険なのは、魔物の血を飲むことじゃない

危険なのは、魔物の血を飲まないことだ！

僕は急いで顎を地面に擦りつけ、バンダナを外すと、熊型の魔物に這って近づく

鳥型の魔物がもうすぐそこにいる、嘴をこちらに向けて、突っ込んできた

熊型の魔物にたどり着き、その死体に歯を立てると同時に、鳥型の魔物の嘴が、僕の後頭部を直撃した

「ミコトォォ！！」

ダイジさんの叫びを聞きながら、僕は安堵した

・・・間に合った！

右腕を頭の後ろに回し、鳥型の魔物の、少し僕の後頭部に刺さった
嘴を掴みながら

僕はさらに血を啜る

最初は細く、頼りなかった右腕が、元の、本来の太さに戻っていく

振り向いて鳥型の魔物に噛みつく

生きたまま血を吸われた魔物は、力なくその一生を終えた

今度は左腕が生えてきた

腕だけが異常にたくましい猿型の魔物が、僕の頭を握りつぶそうと
しているが

その腕の元の方を、握りつぶす

そしてまた血を啜ると、今度は右足が生えてきた

一回り大きい狼型の魔物が飛び掛ってくるが

右足で生きたまま串刺しにする

当然その血も啜ると、僕の体は元の五体満足になった

「ミコト・・・？」

「・・・フッ、フハハッ、ハーハハハァ！！！」

それどころかとても清々しい気分だ！

何か満たされない物が、今宵、初めて満たされた！そんな気分だ！

そんな最高の気分のまま、僕は魔物の虐殺を始める

元から一方的ではあったが、理性の箍（タガ）が飛んだ僕は、これまでより素早く、殆ど敵を見ずに攻撃を行う

そして折を見ては魔物の血を啜る

「・・・っ！」

ダイジさんが何か言いたげであったが何も言わず、魔物の殲滅に集中する

一方的な虐殺は、さらに速度を増した

「・・・ふう、こんなもんかのう？」

「そうですね、もういないんじゃないですか？」

僕等の回りにはもう魔物はいない

いや、いるにはいるが、もう動かなくなったものだけだ

「しかしミコト、どうしたんじゃ？いきなりハジキ飛ばされたと思ったら、狂ったように魔物を蹴散らすから、気でも違えたかと思うたぞ？」

「ハッハッハッ・・」

「それに儂の見間違いでなければ、魔物の血を啜っておったように見えるが？」

「み、見間違えじゃないですかねぇ・・？」

「・・・、じゃあ何故バンダナが外れておるのじゃ？」

「・・・・・」

「まあよい、今日はつか・・・っ！何か来おるぞっ！！」

遠くから紅い目が四つ、空を飛んでやってくる

「こやつらは・・・ドラゴン型かっ！！」

それは僕等の４～５倍以上はありそうな竜型の魔物だった

それが二匹、高速でこちらにやってくる

「クソッ！やっかいなのが来おった・・！気をつけろ！やつらはこれまでのとは訳が違うぞ！！・・・・ミコト？」

僕はそれを見つめながら思った

おいしそうな血の塊が2つ、向こうからやってきた

これまでの血もおいしかったけど、あいつらは何故か、もっとおいしそうだ

・・そうだ、迎えにいこう、そうだ、ソウダ

「ミコト？・・おい、ミコト！？」

僕は走り出していた

誰にも分けてやるものか、あの血は俺のものダ

地面を砕く勢いで蹴り、僕は飛んだ

襲撃の在り方（後書き）

本日は連続投稿いたします！一時間後にまたお会いしましょう！

戦闘終了の在り方

空中に飛び上がり、ドラゴンとすれ違う瞬間に、右手をドラゴンの首に突き刺す

いちごにフォークを刺した時の様に、軽く刺さる

「・・・！オオオォォォ！！」

魔物はそれで初めてこちらに気付いた様で、何やら叫び声の様なものをあげる

僕は右手を刺した方のドラゴンの背に乗った

そのドラゴンは、なんとか僕に攻撃しようとするが、首が回らず、噛みつくことが出来ないようだ

そしてそれを見ていたもう一匹が、先に移動して、すれ違いざまに僕を攻撃しようとする

「・・・クッ、ハハハハッ！」

僕は笑ってしまった、こいつらは僕を殺そうとしている

どちらが強者で、どちらが弱者か、わかりきっているというのに！

僕は左足の指先を、足場のドラゴンに軽く刺して、バランスを安定させ、こちらを噛み殺そうとするドラゴンを迎えた

すれ違いざま、口を開いたドラゴンの下顎を蹴り飛ばす

ドラゴンは、下顎を失ってもまだ敵意を失っていない様で、今度は鋭い爪で攻撃しようとしてくる

「もう飽きたな・・」

そう呟いた僕は足場のドラゴンを蹴り飛ばして、下顎のないドラゴンの頭に近づき、その頭を蹴り上げた

ドラゴンの頭はトマトのように弾け飛んで、辺りに血の霧を発生させた

「ん～♪なかなかいいね～！」

僕はそれを胸一杯に吸い込みながら、首を無くしたドラゴンを蹴って、またもう一匹のドラゴンに降り立った

足場のドラゴンは門に背中をぶつけて僕を潰そうとしたので、僕は思いっきりドラゴンの首を蹴る

ドラゴンの首はグチャッ！っと嫌な音をたてて、殆ど両断された

そして、門に当たって門が壊れると嫌なので、門と反対の上空に向けてドラゴンを投げる

反動によって、すごいスピードで地面に近づくが、少し地面にヒビが入る程度で着地

しばらくして首のほとんど繋がってないドラゴンが落ちてきて、そのあと、血の雨が降った

「アハッ！アハハハハッ！」

僕は口を開けて、その血の雨を受け止めた

その時僕の目は、紅く、紅く、輝いていた

～ダイジｓｉｄｅ～

不思議な少年じゃった

出会ったときは魔物かと思ったが、疑ってかかったら大泣きした

その姿を見ていると、故郷に残した息子の姿を思い出した

仕方がないのでまだ唯一やっている宿に案内した

そういえばそのおかみの夫と子供も、もう戻ってこないことを思い出したからだ

一応村長に話しをして、この村にいさせていただくことにした、後日連れてくる事を条件に

話してみると、ますます普通の少年だった

名前はミコトといったが、紅い目をしているので、よくこれまで生きてこれたなと思ったが、過去を聞こうとしたら、記憶喪失だとのたまった

会話の節々に矛盾を感じるので嘘なのだとわかったが、聞かれたくないのだろうと、そのことは流した

森で狩りをしていると、とんでもない力の持ち主だということが分かった

なんせ木に掌を当てて、そのまま握り潰せるのだ、普通じゃない

そのことに本人も気づいておるようだが、便利程度にしか思っておらん、そんな馬鹿な

数日前の大きな力の気配に関係があるのかと思ったが、本人は魔法が使えないと言う

絶対に関係があると思ったんじゃが、儂の勘違いだろうか・・？

村長は、ミコトを気に入ったようだ

まあ元々滅ぶ運命にある村だ、多少のハプニングは受け入れるつもりだったのだろう

その後も色々なことを教えた

そしてミコトもそれをよく吸収した

きっと息子が生きていたら、こんな生活が出来たのかもしれないと思うと、少し胸が苦しくなった

そんな中、あの予感がした、忌々しい魔物たちの侵略の予感だ

ミコトに戦い方を教えたのは、この時に戦力になるかも知れないと思ったからじゃ

じゃが、おそらく生きては帰れまい

儂は何度となく生き残って見せたが、一緒に戦ったものは皆死んでいった

ただ、他の、たくさんの人がいる場所では、ミコトは間違いなく迫害され、殺されるじゃろう

ならば儂の最後の我侭、ライドと共に死ねなかった儂が、少しでも魔物を蹴散らして死んでいく我侭に、付き合ってもらおうと思ったんじゃ

もし、一度でも侵略を退けられたら万々歳じゃ

しかし、ミコトは予想より遥に活躍した

何度となく魔物に挑みかかっては、その度魔物を蹴散らした

魔物の血の、むせ返る様な状況の中、決して諦めず、何度も、何度も

しばらくして危ない場面がでてきて、もう駄目かと思うたが

前よりもさらに力強く、魔物を蹴散らすようになった

魔物の血を吸い、魔物たちを殺して回る姿は、まるで鬼のようじゃった

そして遂に終わったと思ったとき、奴らが現れた

2匹のドラゴン型の魔物じゃ

儂では?匹相手に相打ち出来るかどうかといった程の強者じゃ

ミコトに注意を促したが、まるで聞いておらず

それどころか、ドラゴンに向けて駆け出しおった

しばらくしてドラゴンがこちらに向けて飛んできたのじゃが、1匹しかおらん上に、ミコトが乗っておる

ミコトがこちらに高速でやってきたと思ったら、ドラゴンの死体が降ってきて

その後、血の雨が降ってきた

ミコトは狂ったように笑い、儂は戦慄した

そして、儂は覚悟を決めた

戦闘終了の在り方（後書き）

いや～、ついに来ました主人公無双！
正直この作品、これが書きたかっただけですｗ
いや、まだまだ続けるつもりですけど、この先全然話出来てない（´・ω・、）
まあ何とかなりますよね！まだ毎日更新続けるつもりですｂ

条件の在り方

僕は布団の上で、何もする気が起きず、ボーとしていた
日はもう高く昇っている
いつもならこの時間はダイジさんと森で昼食をとっている時間だろう
ただ、昨日の事を思うと、ダイジさんと顔を合わせ辛いのだ

今、思い出しても、とてもいい気持ちだった
まるで世界が僕の手の中にあるような
全能感、とでも言うのだろうか
この世の全てを思うがままに出来るような
そんな、気持ちだった

腕を振るえば、血肉が飛び散り
足を振るえば、血の霧が出来る
思うがままに出来る命は、腐るほどあった
もちろん僅かな危機感はあったが、それが逆に僕をより興奮させた

「まるで、魔物じゃないか・・・」

その姿は、襲い来る魔物の姿と何処が違ったのだろうか
いや、一方的に相手を殺す僕は、もしかしたら魔物よりも・・・

コンッコンッ

そんな事をつらつらと考えていると、ノックの音がした

「いるのかい？入るよ？」

「はい・・・」

おかみさんが部屋の中に入ってきた

「どうしたんだい？しみったれた顔して」

「いや、ハハハ・・・」

力ない笑い声が漏れた

「昨日は大変だったみたいだねぇ、まさか本当に魔物の侵略を止めちまうなんて、正直今でも信じられないよ」

おそらく魔物の侵略と、その撃退の噂はもう村中に広がっているだろう

小さい村だし、隠すこともできないだろうし、その意味もない

「いや、ダイジさんが頑張ったから」

「それにしたって、たった二人で、片方が頑張ってどうにかなることじゃないだろう？」

「それは、そう、ですけど・・・」

おかみさんが焦れったそうに言った

「何を塞ぎ込んでるのか知らないけど、あんたはこの村の英雄だよ」

英雄？この僕が・・・？

・・・少し、元気がでた

「ありがとうございます」

「感謝をするのはあたしの方さ」

おかみさんが苦笑した

「とにかく降りといで、ご飯作ったから」

おかみさんについて、1階の食堂スペースに降りた
そこには暖められた特性シチューと、他にも色々手の込んだ料理が並んでいた

「さあ、好きなだけお食べ！」

僕はいただきますをすると、料理に手をつけた
どれもこれも、とてもおいしかった
食べだすと、止まらなくなった
昨日は体をよく動かしたのだ、お腹が減っていないはずがなかった
暖かい料理とおかみさんの心に、涙が出そうになる

「ごちそうさまでした」

僕はほとんどの皿を空にして、手を合わせた

「相変わらずいい食べっぷりだね」

「いや、やっぱり美味しいですもん」

「そりゃよかった」

いつものやりとりをして、少し気分が上に向いてきた

「それじゃ、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

そうだ、ダイジさんだって、何事も無かったかのように迎えてくれるかもしれない

（今日は遅かったのう？まあ昨日は大変じゃったからな）

とかい言って、また快活に笑ってくれるかもしれない

僕は門までの道を、何人かの村人に声をかけられながら歩いた

門の前にはダイジさんが、いつも通りに立っていた

「む、遅かったな、ミコト」

そして何事もなかったかの様に、僕に声をかけた

「すみません、寝坊していました」

僕は心の中で安堵しながら、思わず嘘をついた

「まあいいわい、とりあえずなんじゃが、話がある」

心臓が止まるかと思った

「話、というのは？」

「なに、昨日のことじゃ」

「何か、あったんですか？」

「いや、ミコト、お主のことじゃ」

「それは、・・・僕が魔物の血を吸っていたことですか？」

「・・・、・・・そうだ」

「何か、問題がありますか？」

「いや、まあそれだけじゃないんじゃよ」

「と、いうと？」

「お主をここにいさせることを村長と話した時、一つ、条件をつけられたんじゃ」

「・・・条件ってなんですか？」

「儂はこれでも腕が立つ方でな、大概の魔物には勝てるのじゃ、村長もそれを知っておる、そこで、ミコト、お主をこの村におく条件じゃが」

「・・・・」

「儂がミコトを監視する、ということじゃ、しかし、昨日の戦いではっきりした、儂ではお主を倒すことができない、じゃから「もう

いいです」」

「・・・もう、いいです、つまり、僕に、僕に、・・・・っ」

「・・・そうじゃ、お主、

この村から、出てってくれんかのう？

」

ねえ神様、もしいるのなら、
どうして僕がこんな目に遭うのか、教えてくれないか？

条件の在り方（後書き）

誰が2話だけと言った、今日は3話連続だぜぇ～！！（爆）

すいません調子こきました、大丈夫です、反省してます。
ミコト君、かわいそう
ほんと、こんな運命にするのは何処のどいつだいぃ～？
あたしだよ！！
ガキ使は相変わらず外しませんねｗ

いや、大丈夫です、反省してます、いやほんと、あｓｄｆｊｌ

旅立ちの在り方（前書き）

お気に入り登録が１０件になりました！ハレルヤ～！！
ありがとうございます！今後もどうぞ、よろしくおねがいします。

「そうです、・・・か」

「なに、別に今すぐという訳じゃない、準備として2、3日ならいてもよい」

「わ、わかりました、それじゃあ今日のところは、宿に戻りますね？」

「ああ、それがいいじゃろう、今日はゆっくり休んで、明日準備するといい」

「そう、ですね、それじゃあ、また」

「ああ、またのぉ」

僕は宿に向かって歩き出した

下を向いて、必死に泣きそうになる顔を隠した

声をかけようとした村の人には、体調が悪いと断って

そうやって宿に着くと、おかみさんが2階から降りてきた

「あれ？どうしたんだい？もう帰って来たのかい？」

「は、はい、今日は休憩だそうです」

「そうかい、夕飯はどうするんだい？」

「き、今日はいいです」

「そうかい・・・ゆっくり休みな」

きっと僕の様子から心情を察したのだろう、おかみさんは必要以上に声をかけてこなかった

部屋に戻ってベッドに倒れこむ

僕が外に出ている間にシーツを替えてくれたのだろう、清潔な匂いがする

僕はそのまま、声を押し殺して泣いた

何故なんだろう、どこで間違ったのだろう

血を吸わなければよかったのだろうか？

しかしそれでは死んでいたし、魔物の攻撃で村は滅んでいたかもしれない

じゃあ戦わなければ？

しかしダイジさんだけで、あれだけの魔物を退治出来ただろうか？

少なくとも最後の2体は、無傷では済まかっただろう

僕がこの世界に来たのが間違いだったのだろうか？

それこそ、どうしようもない

もういっそ、村を無茶苦茶に壊してしまおうか？

・・・ダメだ、出来る訳がない！

でも、このまま魔物の血を吸い続ければ、いずれは・・・

僕はやはりこの村にいない方がいいんだろう

そういった事をグルグル、グルグルと考え続ける

何故ダイジさんは僕に優しくしてくれたのだろう？

最初から魔物として扱ってくれれば、こんなに胸が痛まずに済んだのに

何故おかみさんは僕なんかを泊めたりしたんだろう？

そうしてくれなかったら、もっと旅立ちは楽だったのに

何故僕はここに留まること選んでしまったのだろう？

なぜ魔物の血を吸わなければ、手足は維持出来ないのだろう？

何故？なぜ？ナゼ？・・・

・・・答えは、出なかった

いつ、どんな状況でも、朝は平等に訪れる

また、日が昇ってきた

散々悩んで、考えて、結局なんにもなんなかったけど、少しだけ気持ちが落ち着いた

明日、出発しよう、また辛くなる前に

1階に降りると、おかみさんが受付に座っていた

「あらおはよう、酷い顔だねぇ、さっさと洗ってきな」

「そんな、いきなりの発言で酷いのはどっちですか」

おかみさんが寄越したタオルを受け取りながら会話をする

・・・このやりとりも、明日の朝で最後だ

僕が井戸で顔と、ついでに体を洗って戻ると、暖かい朝食が待っていた

ご飯と、ハムエッグと、スープと、サラダと、漬物と、果物のジュースだ

僕はいただきますをして、食べ始める

やっぱり今日もおいしかった、普通の定食なのに、何故だろう?

前に聞いたら、

「愛情だよ」

と、答えが帰ってきた

満更嘘でもないのかもしれない

ごちそうさまをして、おかみさんに向き直った

おかみさんに、最初に伝えなければいけない

「おかみさん、俺、明日この村を出発します」

「・・・そうかい、そりゃあ寂しくなるね」

「でも、おかみさんとこの宿のこと、絶対忘れません！」

「ははっ、そうしてくれるとうれしいねぇ、今夜は忘れられないように、より手をかけて料理するよ」

おかみさんは少し涙ぐんでいた

「あ～やだやだ、歳をとると涙もろくてねぇ」

「おかみさん・・・」

僕も、つられてまた泣きそうになった

「そうだ、あんた旅の準備は出来てるのかい？」

「いや、これからしようかと」

「なら丁度いい！手伝ってやるよ！」

おかみさんはそう言うと、僕を連れて村を回った

回った先の村人は、事情を聞くと快く協力してくれた

何故これほど協力してくれたのか、おかみさんに聞くと

「あんたが森から持ってきたもん、みんなに分けてやったのさ」

どうやらおかみさんは、僕が持って帰ったものを、村のみんなに僕の代わりだといって配って回ったそうだ

段々と村の人が優しくなってきたのは、そういう理由があったのだと、この時初めて気付いた

テント、寝袋、ナベ、リュックサック、燃料、火打石、水筒、コート、いろいろな旅に必要な物をもらった

火打石は行商人から珍しいものとして買ったとか何とか

そうしている内にあっという間に夜になり、おかみさんの最後の夕食をいただくことになった

昨日に続いて、さらにグレードが上がった気がする料理は、どれももはや芸術的な出来栄えだった

特性のソースがかかった鹿のもも肉のステーキ、マカロニと野菜がたくさん入ったグラタン、骨まで溶けるほどじっくり煮た魚の煮付け、黄金色のスープ、香り高いリゾット、甘くとろけるようなフルーツ

どれもが全て、極上の味わいだった

僕は食べた、食べた、食べまくった

お腹に余裕がなくてもまだ入った

隠し味の愛情が、どの料理にも溢れていた

「こんなにおいしいものを食べたのは、生まれて初めてです！」

「記憶喪失の人の意見じゃ、当てにならないねぇ」

そう言って、おかみさんは笑った

その夜は、思いのほかぐっすりと眠れた

朝起きて、顔を洗い、朝ご飯を食べて、荷物を持って受付の前に立つ

「本当に行くんだねぇ」

「ええ、行かなくちゃいけませんから」

「・・・止めはしないよ」

「・・・大丈夫です、僕は、きっと大丈夫です」

「そんな顔じゃ、信用できないね」

そういっておかみさんは包を僕に渡した

「昼にでも食べな、簡単なものだけど、少しは足しになるだろう？」

正直僕の今の顔は決壊寸前で、見られたものじゃないだろう

「ほら、行きな！戻ってくるんじゃないよぉ！」

おかみさんの声も、どこか頼りなかった

僕は宿に一礼して、門に向かって歩き出した

道の節々に、村の人たちが見える

みんな、僕を送っていた

門にたどり着いた

ダイジさんがいるかも、と期待をしていたが、どうやらいない様だ

そのまま行こうとして、声がかかった

「ミコト、これを持っていけ」

その声は、間違えなくダイジさんの声だった

僕が振り返ると、ダイジさんが、森に入るときに貸してくれた物を一式持って立っていた

「い、いいんですか？」

「ああ、いいから持っていきなさい」

僕はそれを受け取って、いつもの様に装備した

僕はもう、我慢できなかった

一筋、涙が溢れた

「ほ、ほんと〝うに〝、あ〝りがと〝うございま〝し〝た！！！」

「こちらこそ、ありがとう、向こうでも達者でな」

そういうとダイジさんは僕の肩を押して、向きを変えて、

「ほら、もう行きなさい」

そういって背中を押した

僕は途中、もう一度だけ振り返って、深く一礼し、そのまま歩き去った

「絶対に、生き残ってくれ・・・」

そう呟いて、一筋の涙を流した、ダイジさんのことも知らずに

旅立ちの在り方（後書き）

これにて第一章終幕です。

街、村、国、全てが僕を拒絶した
それでも、僕は生きつづけた
石を投げられながら、それでも諦めなかった僕の前に、現れた人物とは・・・？
次章、黄昏の出会いと結束の心
乞うご期待！

嘘予告です、まあ本文書き終わった瞬間に作ったんでｗ
全くの嘘かっていうと、そうじゃないんですけどね、なんせ一発書きですから、その時の気分で内容が変わりますから

今日書いた話の別れのアレはリスペクトです、リスペクトって言っておけば大概は許されると思うのです、もしくはトレビュート？
何に対してだよ、って思われた方は気にしないでください
あれかっこいいですよね～

ある手紙の在り方

ようやく、ようやくだっ！

「見えた～～っ！！」

苦節7日間！ついに僕はたどり着いた！

長かった、長かったよ

隣の村に行くだけだとタカをくくったのが間違いだった

こんなに長くなるなんて・・・

無論、それには理由がある

アレは、村を出て2日目のことだった

～回想～

僕は気分よく走っていた、もうすぐ隣の村に着くからだ

おかみさんの話では、間に2ヶ所、広めの野営する場所があり、その次が村になっている

僕は1つ目の野営ポイントを飛ばし、2つ目でテントを張って就寝

よって翌日、つまり今日中には隣の村に着く予定なのだ

そうこうしている間に村が見えてきた

最初は魔物だと思われるだろうが、話せばきっとわかってくれるはず

もし駄目でも、僕には切り札がある！

僕はスピードを落とし、旅人を装って（実際に旅人なのだけど）門に歩いて向かった

そして、前回の教訓を生かし、遠目から話しかけた

「すみませ～ん、旅の者なのですが～！」

「おお、どうした！早くこっちへ来い！」

それを聞いて歩き出す

しかし、しばらくして、門番の態度が変わった

「ま、魔物！？この村になんの用だ！？」

「私は魔物ではありません！！隣の村から来ました！」

「ではノウの村は滅んだのか！？」

因みにノウの村とは昨日までいた村のことだ

「だから違いますって！僕は旅に出たのです！」

「しかし、お前、目が紅いじゃないか！」

「そ、それは生まれつきです！」

「そうなのか・・・っ！いや、騙されないぞ！この村に魔物は一歩たりとも入れん！！帰れ！」

くそぅ、うまくいかなかったか・・・

だが、僕には切り札がある！

「この手紙を読んでください！僕の身元を保証するものです！」

そういって取り出したのは、蝋で封のされた手紙

村を出た後、森に入る時いつも装備している袋を確認したら、中に入っていたのだ

ダイジさん・・・

「そうやって近づいた所をグサっと「しません！」・・・ではこうしよう、お前が半分こっちに来い、そこで手紙を置いて、2倍下がれ」

何故2倍も・・・しかしこれしか手段がないならしょうがない

「わかりました！」

僕は言われた通り、半分距離を詰め、手紙を置いて大体2倍下がった

「よし！」

門番は手紙に近づき、こちらを警戒しながら、２・３回掴み損ないながら手紙を手にした

そして、門の方に下がっていき、

「誰か～～！字の読める人呼んできて～～！！」

村の方に叫んだ

そういえばこの世界の識字率ってどれぐらいなんだろう？

しばらくして、おじいさんが来て手紙の表面を読んで門番に伝える

「おい！この手紙だが・・」

「どうしたんですか？」

「宛先がここじゃないぞ？」

「は？」

「いや、ここより２つ隣の街だぞ、この宛先」

「・・・え？」

「開けてもいいのか？そうすると手紙の信用がグンと落ちてしまう

が・・・」

「・・・！い、いや、ちょっと待ってください！」

どういうことだ?てっきり隣の村に入るための、口利きの手紙だと思ったのに・・

「字だけでは誰が書いたか判別は難しいぞ?」

それはそうだろう、しかしここから2つ隣か、まさかライドではあるまいし、どういうことだ?

「・・・とりあえず返していただいてもよろしいですか?」

「うむ、よかろう!ただし村には入れんぞ!」

なんという頭の堅い・・・

「いいじゃないですか!入れてくださいよ～!」

「いや、駄目だ!魔物かもしれない存在を村に入れる訳にはいかん!!」

「どうしても、ですか?」

「どうしても、だ!」

試しに一歩近づいてみた

ジャキンッ!!

門番は即座に戦闘態勢に入った

「それでも通りたくば、俺を殺してからにしろ」

・・・これは無理そうだ

「わかりました、村を迂回してもいいですか？」

「それぐらいならいいだろう、ただし、畑を荒らすなよ！」

僕をなんだと思っているんだろうか・・？

そうして迂回して、そのまま進み、次の村では・・・

「・・・！魔物か、よし、かかってこい」

「違います、魔物じゃありません！」

「どちらにしても、お前の様な不審な存在を、この村に近づける訳にはいかん、去れ」

「せめて何か食料をくれませんか？動物の毛皮ならありますよ？」

「・・・いや、駄目だ、去れ」

前の村の門番より、さらに堅物だった

～回想終了～

そうして今、ようやく手紙の宛先の街にたどり着いた

ダイジさん、どういうつもりだったのだろう？

それも、この街に入れば判明するだろう

街が段々近くなってきた

・・・大きい

これまでのが村で、ここが街と呼ばれるのも頷ける

門もこれまでよりもしっかりしているし、壁も厚く、高い

これなら多少の魔物が来もビクともしないだろう

僕は、少し遠目から呼びかける

「すいませ～ん、ノウの村から来た者ですが～！」

「おぉ、長旅ごくろう！早く来るがいい！」

「それなんですが、僕の目を見てください！」

「・・・！紅い！？貴様、魔物か！？」

「違います、生まれつきです、兎に角、僕の身分を証明する手紙があります！近くに置くので取りに来てくださいませんか？」

「お、う、うむ、よかろう！」

そうして手紙を門番に渡した

「これは・・・この街の統括主任への手紙だな、しばし待たれよ！」

そうして、僕はずいぶん長く待たされた

～統括主任室～

コンッ、コンッ、コンッ

「失礼します！本日東門にて門番の任を負っている者です！」

「入れ」

「失礼します、主任宛の手紙を持った紅い目を持つ男がいます、こちらがその手紙です」

・・・感情を感じさせない、鉄の様な男が手紙を受け取り、差出人を見る

「ダイジ・・・か、懐かしい名前だ」

そう呟いて封を開け、黙々と読んでいく

「私は仕事を片付けてから行く、お前は門番の任に戻り、その男を待たせておけ」

「はっ！」

静かになった部屋の中、男の口角が僅かに上がる

「紅い目の男とは、つくづく出鱈目な奴だな、ダイジ」

鉄のような男は、火に手紙を近づけて、そして・・・

ある手紙の在り方（後書き）

結構難産でした、、
毎日シンドイ、ワタシ、ヤメル、イチニチ、カンカク、アケル
とか言い出すと、多分書かなくなるので、まだまだがんばります
ふるえるぞハート！燃え尽きるほどヒート！！おおおおおっ！！！

街中の在り方

～統括主任室～

手紙は、以下のような内容だった

拝啓、統括主任トー・マトン殿

残暑厳しい季節が終わり、過ごしやすい季節に変わる今日この頃、如何お過ごしですか？

私は未だノウの村に止まり、魔物を退治する日々です。

さて、この手紙を届けさせた者、黒髪にグレーの手足の紅い目の男についてです。

その男は私が森に捨てられていたのを拾い、森の奥で隠居する者に預けた赤子です。

名をニノマエ　ミコトとつけられました。

なんといっても紅い目となれば、人里で暮らすのは不可能と見て、森に捨てられたものと見ます。

同じ理由で私も一人暮らしの奇特な人に預けたのですが、そのため人に会うことがなく、酷く世間知らずに育ちました。

里親が死んだため、私がある程度面倒を見たのですが、まだまだ知らないことばかりだと思います。

以前森で狩りをした際、頭を打ってしまったため、さらに記憶の大半を失ってしまいました。

しかしそれ以来、戦闘に関してはこれが仰天する程の力を発揮して、一騎当千の武力の持ち主になりました。

この村で終わらせるのは惜しいと思い、あなたに預けます。

ミコトは温厚で、謙虚であり、また真面目でもあります、どうか、手厚い保護を、お願い申し上げます。

また、酒でも飲みましょう。

敬　具

ライガのダイジより

その手紙を、鉄の様な男、マトンが火にかざして炙ると、裏の面に文字がでてきた。

そこにはこう書いてあった

～裏～

よ～マトン、これを読んでいるということは、まだしぶとく生き残っていたようだな

それでミコトのことだが、本当の所は正体不明だ、いきなり村に来て、記憶喪失などと言っていた

おそらく嘘だ、が、しかし戦闘に関しては間違いない

戦場に放り出してくれれば、勝手に成果をあげるだろう

別に手厚い保護なんて期待しないが、生き延びれる最低限の保護はしてやってくれねぇか？

よろしく頼む

～終～

それを読んだ後、マトンが手紙に魔法をかけた

『見えざる文字よ、ここに現れろ』

すると裏の面に大量の文字が浮かび、元の文は読めなくなった

古典的な暗号の方法だが、実用性があり、昔二人でいた時に話した方法だ

「・・・・」

マトンは無言で手紙を見つめると、書類の仕事に取りかかった

～東門の前～

・・・いったいどれだけ待たされるのだろう

もうすぐ日も沈んでしまう

僕は門を遠目に見ながら、待たされ続けていた

その間、ロープで罠をつくる練習をしたり、毛皮を干したり、木を素手で削って動物を作ったりしていた

そして、もう寝る準備をした方がいいかな?っと考え出した時、その人が現れた

「・・・」

男は無言でこちらに来て、無言でこちらを見て、無言で振り返って歩きだした

因みにこの間全て無表情である

呆気にとられて見ていると、一言

「・・・ついてこい」

とだけ言って、また歩き出した

そのままずんずん進み、門番には、

「この者の身分は、私が保証する」

と言って、また歩き続けた

・・・大丈夫なのだろうか？

～統括主任室～

「・・・入れ」

そう言われて入ったのは、物がなく、机だけがある殺風景な広い部屋だった

無言のまま椅子に座り、こちらを見て、また一言だけ言った

「君には明日から、兵士として戦ってもらう」

「・・・はい？」

「これが身分証明の代わりだ、持っておけ、持ち場は南だ」

「えっと、戦えばいいんですか？」

「そうだ」

・・・それで話は終わったらしく、沈黙が続く

「えっと、ダイジさんのお知り合いですか？」

「そうだ」

「」

こっ、言葉がでない・・・

この紙があれば買い物や宿泊ができるのだろうか？

兵士として戦うといっても、制度はどうなっているんだろうか？

というか、名前も聞いてないんだけど・・・

色々聞きたいことがあるが、無言の圧力に押されて、僕は部屋を後にした

道の途中、出会った人々に、驚愕の眼差しを受けながら歩く

中には目を見た瞬間、腰砕けに転ぶ人までいる

仕様がないからコートを着て、フードを深く被った

・・・まだ暑いのに

街は活気づいており、顔をあげればたくさんの人々が道を歩いているはずである

無論、今は俯(うつむ)いており、確認は出来ない

そこかしこから人の声が聞こえる

物を売る声、商談をする声、笑いあう声、噂話をする声

村とは違い、人がいっぱいいる

チラチラと顔をあげて道の脇にある店を見ると、いろいろな店があるが、一番目立つのは武器屋だ

軽く見ただけで2、3軒あった

そんな中、なんとか宿を見つけた

ベッドの絵が描いてあったので、間違いないと思われる

とにかく休みたかった僕は、受付に呼びかける

「すみません、ここは宿ですか?」

「そうですよ、お泊まりですか?」

「はい、安めの部屋がいいんですけど、空いてますか?」

「はい、空いております、今日の夕食はお付けしますか?」

「できればお願いします」

「かしこまりました、何泊いたしますか?」

「そうですね・・・一泊いくらですか？」

その時、受付の人の顔を見てしまった

まだ若い可愛らしい人だった

が、見たということは、見られたということで、

「あ、ああっ！キャ～～～～～～ッッッッ！！！

「何事ですか！？」

「ま、魔物がっ・・・魔物が！」

そういって受付の女の子が僕を指差す

「魔物？そんな街中にいる訳がないじゃないですか、人騒がせな、ね、旅のお人」

そういって警備隊の人が僕の肩に手を置いた

その拍子にフードが取れた

・・・目があった

「・・・まっ！魔物だ～～～っ！！！！」

あんたもかよ！

街中の在り方（後書き）

はい、全然街中の様子がありません、タイトル詐欺です
この作品にはたくさんありますので、注意が必要です
作者の実力が足りないばかりに・・・

ご一読、ありがとうございます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6764z/

魔血吸の在り方

2012年1月4日04時47分発行